

怪本

鴉片煙史

第一回

「アルフオンス。ド。ステルニイ氏は十一月にブリュセルに来て。自ら新曲悪魔の合奏を指揮すべし。」と白耳義獨立新聞の紙上に出でしとき。府民は目を倒だてたり。

樂人は肩を聳かし。唇を噛みてステルニイが音に通ずるとの深からざるを刺り。又府民が郷土の樂人を震はして外をのみ求むる癖あるを憤りき。樂を知らざる府の富豪は。いつになくこれに應むて。ステルニイが囁をなすと八日ばかりなりき。囁は大抵彼が情事に關る話にて。其伶人たる伎倆につきては。隻語をだに聞かざりき。かく評判ありしも秋の頃にて。語るべき事の少なかりければなるべし。

ステルニイはその頃伶人として名を博したりしのみかは。社交上にも獅子と仇名せられて。人を凌ぎたりき。名ある貴婦人の彼を戀慕ひしものあり。ショルツ。サンが彼のために書きし稗史といふものさへ世に傳はれ

りき。今其書の名を何といひしやらむ。知る人なきのみ。又某侯の夫人はかれがために硫酸のみて死にき。

五年前なりしが。彼は忽然跡を潜めて合奏をもなさず。新曲を粹に上すともせずなりぬ。今や新曲「悪魔」の名と俱に彼が名は萬人の口に上ぼりて。世の人は訝り。伶人は笑ひぬ。

第二回

悪魔の曲の試を始めむと定めしは十一月五日のゆふべなりき。

「グラン。ダルモニト」の樂堂には早や人々集まりたり。常の試のをりには増して。瓦斯燈の數も多けれど。暗き客座と怪しげなる煩悶く指揮臺とのさま。何どなく物すごく。瓦斯。ほこり。濕りたる布の臭。空気の裡に満ちて。鼠色なる霧は後に入りし人の衣の上

に凝りて。潤ひたる光を放ちたり。堂内に坐しても。門外の天氣のあしき思ひやらる。あどけたる謠ひての瓢箪なりに下ぶとりしたる顔にて。毛だらけなるが。美しく裾いろになりたる上「シヤツ」を見せ長靴の黄なる泥を敲き落し。裏返して捲き上げたる袴の下の端を伸ばして卸したる。髪あどろなす謠ひめの。心地あしといひあひて。懐中藥取りかはしたる。伶人どもの志ぶ／＼に樂器をいぢりて。節を成さいる「井オリン」の音の間にをり／＼截れたる絲の耳を裂くやうなる響をせさせたるなど。見聞くもの皆何となくすさまじきさまなり。

人の世話にて仲間入りしたる素人二人あり。一人は獨逸うまれ「ピヤノ」の師匠にて。將來の樂に酔ひたり。一人はどころのものにて。人にロシニが友とあだなせらる。

調子は合せたり。こゝかしこにて「井オリン」の一手二手。試みたる聞ゆ。瓦斯の焰はかすかに鳴りたり。謠女らは寒がりて足踏みならし赤くなりたる手をすりあはせたり。ステルニイはまだ來ず。

ロシニが友は謠女らの側に寄りて相識りたる次高音謠ひに向ひて。「御身には氣の毒なり。ステルニイは將

來の樂といふもの此のみ耽りたる人なれば。彼が曲を歌はせむとするは。人の喉を苦むる最上の手段とやいふべからむ。彼が曲中の「アリー」を歌ふは。今まで得たる音樂上の快樂の罪滅ぼしなるべし。

次高音謠ひの婦人。「それは餘に酷ならむ。ロシニが友といはる。君なれば。將來の樂といふものを好みたまはぬは怪むべきにあらざ。此度の曲の中にも。人の倦むべき處なきにあらねど。また面白き處もあり。」

ロシニが友は打聞きて。「將來の樂といふ派におもしろき處あらむとは。おのれは思ひかけず。」とつぶやきぬ。

「されど君もワグナル。ペリオニなどを。非凡の人なりとは思ひたまふべし。彼等は音樂の世界に一生面を開きしと疑ふべきならねば。」

「君がたまふ一生面は。鬼の假面かぶりて人を嚇す類なりとは知りたまはずや。ワグナル。ペリオ、はげに凡人ならざるべし。唯これに附和する輩の心こそ知られぬ。世には『ミュシツク。デクリプティフ』といふ新發明の樂を説くものあり。何ぞと問へば。一揆おこしたらむやうに叫びあふ『井オリン』の響のみ。これに題して該撒が死と云ひ。ホラチイルとクラチイルとの

「聞と云ひ。エズウフの噴出と云ふ。聞く人は何事に
か感動すべき。徒に頭痛の種となるべきのみ。」

かくいひてロシニが友は高く笑ひ。さていふ。「ステル
ニイが曲には何事をか巧に寫しだしたる。才なき人
の心のさまにや。」

「悪魔には珠を含みたり。彼ベサロの水禽も。」と次高
音うたひはいひかけしが、「見たまへ。ステルニイのは
や來と見ゆるを。たゞ離別の一ふしに心をつけ玉へ。」

樂長と親しき友の一群とに伴はれて。ステルニイは壇
に上りぬ。獨逸うまれ「ピヤノ」の師匠は。嬉しげに
彼が面を見つめたるを。かゝるには慣れたるステル
ニイなれば。目にてこれに答へ。一同に軽く體をなし

て。倚譜架の前に立ち。鷹の眼を睜きて。伶人の一隊
を見わたすに。「井オリン」の組一人闕けたり。「闕けた
るは誰ぞ。」と問ふ。

「井オリン」の組の人々は。顔見あはせて聞えぬやうに
あらぬ男の名をいひ。「彼は猶病みたりとて斷りいはせ
ぬ。」とつぶやく。

樂長。「彼が病院を出でしより幾日かたちたる。彼はを
りく。試の席にはいでぬとあり。」

ステルニイは笑みつゝ。「それを君は咎めたまはぬに
や。」といぶかりて問ふ。

樂長は愧ぢたるさまなり。「彼は眞の席にて錯せぬも
のなれば。深くも責め候はざりしなれど。不都合なる
とはいふまでもあらねば。必ず罪を正し候はむ。」

ステルニイは肩を聳かして。「罪したまふはやうなし。
されど次の試には闕けたる人のなからむこそ願はし
けれ。」

言畢りて架を敲きつ。
彼が指揮するさまは。エルヂイの花々しき。ヘクトル。
ペリオ、の物凄きには似ず。一種の面目を具へたり。

初のはたらきは靜にて。殆疲れたるやうなり。面は
睫毛も動かぬばかり。見るまに目かたやぎ。唇のほと
り引きつけれるやうになり。胸に波打つ。曲の頂點
に到れば。次第に高く手を舉げて。鳥の翼を舒ばす如
く。地を離れて飛ばむとし。忽然沈みたる面色を見せ。

いたく疲れたる如くなるは其癖なり。
命にや障らむと「ピヤノ」の師匠は氣を揉み。ロシニが
友はこけ威しなりとて憎みたり。

曲の初は果してわが思ひし如くなり。とロシニが友は
刺れど。「ピヤノ」の師匠はなだれの落ちたる如き音を

開きて。背に冷汗を流したりといふ。

この處をば一たび繰返して。温習は猶次の日を期して

止みつ。次高音うたひは。この時表ぬぎすてロシニ

が友を一目見て立ちあがり。式の如くに笑を帯びて歌

ひはじめぬ。聲は戯曲に似たる「レチタチーフ」に起り

て。泣く如き「メロヂイ」に入る。

嗚呼眞の「メロヂイ」なり。工を弄したる迹なくして。

一往情深きさま。モツアルトにもをさく劣らじとあ

もはるゝに。少し沈鬱の氣象を含ませたり。ロシニが

友はおもひかけずといふやうなる面持す。

をりくは。悪魔の曲は歩ごどに其妙を加へて。人間界が

いては。天堂を失ひて泣くといふ心を寫したる離別の段に至り

て其頂點に達したり。俗人ども皆一時に立ちて。覺え

ず喝采するに。ステルニイ涙を流して。「かゝる。喜

はけふ迄知らざりき。諸君の盡力は肝に銘じて忘れざ

人怪しとおもふのみにて。其故を解せざりき。

ステルニイはこれより某伯の夫人の車に乗りうつり

て。モンタグ。ド。ラ。クウの街を上らせ。かしてにて

貴人の優しき聲して響むるを聞きて。豊なる饌に向は

むとす。車の「悪魔」興行の赤き貼札の前を過ぐるとき。

ステルニイは其前に立ちたる男を見たり。

そは敗れたる「フィイルツ」の帽を耳まで被ふりて。古く

毛の截れたる衣を纏ひ。踵のすれたる靴を穿きたる肩

廣き男なりき。

前なる車に支へられて。ステルニイが車はまばし止ま

りたるをり。彼はこの男の横顔をのぞきしに。不思議

なり。ステルニイ色蒼ざめて青天鵝絨の車の蒲團の上

に後さまに倒れぬ。

立ちたる男は酒に耽りて。面のいたく變りたるを。ス

テルニイはその昔識りてやありし。

いかにとも知られぬ。此男の姿は途ゆく人の目にも

たちて。何ともなく氣味悪し。流れ肩に力なげなる身

の構。歩むさまさへ哀れげに見ゆるに。其風世の常な

らず。燃えけん燭の迹猶残りて故ありげなり。少し厚

きは半ば閉ちて物を見るときもなきさまなるが。日を懼る

る猛獸の如く。又世をはかなみておのれがゆくべき狭き路の外を見むと誓ひし人の如し。此面に表はれたるは舊き悲痛と新しき感傷となり。程なく道にゆるみのつきたれば。伯家の車は客を載せて馳去り。彼あやしき男は「バタ」店に入りて。焼酎賣る机の前に立ち、「シユネウル」一杯と叫びぬ。

第三回

この人は誰ぞ。おほ空のをりく地に下して。解かせむとする謎語の一つなり。されど地は。この謎語のあまりに怪しきために。これをえ解かずして。そがまゝに葬らむとす。この人はブリユセル(白耳義)にて生れぬ。母は「ド。ラ。モンテエ」といふ芝居のうたひめにて。父は匈牙利の樂人なり。匈牙利の樂人どのみにては。猶そのいかなるものなるかを知りがたからむ。かしこには「チゴイナル」だねの樂人ありて。隊を成して歐羅巴大小の都に往來し。乍ち來り。乍ち去り。野馬の生滅に似たる社會をなすなり。この人の父もさる類なりきといへり。

母の名をマルガレエタ。フアン。ザイレンといふ。その

子の名は、かたの祖父の匈牙利名にて。姓も如威の姓をつぎたり。こはその子のまだ生れぬ間に。父の逃去りたりければなり。このケザ。フアン。ザイレンが穉きときは。黒き髪圓き顔を圍みて。瞳墨を點じたる如く。身の何となく重たげなる。ひら地にて流れ多きふるさとのさまに似たる所ありき。その心さまは夢みる如く穩にて。又燃えあがる如くはげしく。いづれとも定めがたかりき。

この人のおひ立ちし街は。ルユウ。ラアエスタインとて。高く低く曲りて。臭きと堪へがたきところなり。ルユウ。モンタニエ。ド。ラ。クウのサント。ガヂユールに向へるかたの背にあたりたれど。世には殆どことを知るものなからむ。

都の開明は。この街の隣までは來たれど。そこよりは入らず。貴人の車も。このあやしげなる街を驅りて過ぐるとなし。白耳義は平遠の地なれど。その都は丘多し。この街の高く低く。定めなきも。それに依れるなれど。その幅の狭きに併せて。車に入るを防ぐに足れり。これが習となりて。この街の民は。多く其家を街の半ばまで。引きのばしたり。

民のあわざと汗れたるさまとは。街にみなみの國の風

情を興へたり。天然のおほ石を恣まゝに組みあはせた
る道の上には。半ば腐れたる野菜の屑。南京兔の革。
糊紙もて作りし花の凋れたる。ふりたる舞の手袋。灰
などさま／＼の塵あくたうづだかく。そのたゞ中をゆ
る／＼と流るゝは黒き水なり。

ぬしなき犬あり。足きはめて長く「ヒエ、ヒエ」とい
ふ獸めきて。背曲り。毛ちれたるが。食を求めて。
塵芥の裡をさま／＼ふさま。

見たるに似たり。研ぎもの師また。其外のいやしき業
に日を送るもの。時候によりて。日のあたり善き處に
すまひ。又蔭をもとめて座を占めたり。ぬまきのまゝ
にて。髪も蓬なす女ども。窓より首つき出して。はて
しなき物語す。さらぬは紅く腫れたる兩の拳を。腰の
あたり推しあて。門口にたゞすみ。目をまばた
きて。時の這ひもてゆくを見やりたり。

軒端揃はず。狭くして高きあれば太くして低きあり。
その低きものは。上より壓されて。土中にめりこみた
る如く赤みどり色の。あそろしげなる屋根をいたゞき
たり。かしここの窓には。小さき鉢植の木あり。ま
た布を垂れて深く藏したるもあり。家なみのところど
ころには。きたなげなる酒店あり。赤黒くぬりたる戸

の上。白く「ヒール。フェルコオプト。メン。ドラ
ク」こゝにては酒を賣るゝと題したり。

これより裏の街々は。ゲザが若かりし頃。みな見ちが
ふるばかり相似たりしが。尤も汚れたるはルエウ。ラ
アエスタインなりき。ぬふたげなる街の物おとを破り
て。をり／＼聞ゆるは樁つくる槌と石きざむ鑿との聲
のみ。年を経て灰色になりし寺の後壁には。あやしげ
に大なる十字架倚りかゝりたり。これに縛りつけられ
て。濟度しがたき衆生を見あろしたる耶穌基督の光明
は。煤にて包まれたり。街を流るゝ水の。あまりに濁
りたらぬ日には。色硝子張りたる。狭き寺の窓。これ
に映じたり。

この間にてゲザはおひ立ちぬ。母はかの時の過ぐるを
門口に立ちて見る女の一人なりき。美しき白耳義の女
子なれば。身のたけ高く。少しおもたげなる處ありて。
手足は白く肥えて方あり。おもての色は紅さしたる乳
汁のやうなり。白き歯を見せて。軽く開きたる朱唇。
まはりに薄くれなゐの色ある鼻翼。少し飛びいだした
るやうなる目。ルベンスが畫のマグダレナに似たる獅
子色の髪の波打ちたる。これ其姿のあらましなり。芝
居に出でぬとき。また門口に立たざるときは。屋根裏

の間なる蒲團の上に坐して絶えずもの讀みたり。そのふみは古道具店にて。何人か買來たりし數年前の畫入雜誌にて。中には多く盜俠の事など書いたり。ラアエスタインの女はかはるゝこれを讀みて。心の養

どしたりしなり。ねふたきまでに怠り。力なきまでに入好く。グザには甘き言葉のみかけて。いつの頃よりか。此家に迷ひきたりし灰色の大猫にも。やさしくのみしつ。唯束の間の快樂知りたるのみなれば。月の初には子に旨きもの食はせ。月の終には人に物借りて暮しぬ。

グザはいとけなき時より音楽を好みて。まだ物もえいはぬころ。母の抱きて小歌うたふを聞くに目をみひらきて。母の顔を打まもりぬ。

始めてこの子に「井オリン」を教へしは。マルガレエタが友某なり。グザが進歩は驚くばかり速なりき。その際母の困苦甚しうなりしかば。吾子の「井オリン」弾くを奇貨として。これに頼らむとする心起りぬ。まだ九歳なりしグザは。幾程もなく。その頃「グラン。サブロン」に假小屋掛けたりし藝人仲間へ雇はれて「井オリン」を弾くことになりたり。この藝人仲間といふは。美男の輕わざ師一人。モラロとて極めて醜き矮人

一人。驢馬一頭。猿四匹なり。驢馬には三本のあしにて行く藝ありといへど。恐らくは藝を須たずして。かく行くならむ。この仲間髪長く。胸いと狭き「スピチット」彈きあり。取れたる器より。あやしげなる「ワルツアア」。「ポルカ」などの曲を打ち出だせり。グザが役は年老いたる笛ふきの女と共に。この男の業を助くるなり。あはれ。この男。生涯に一たび輓歌なりともかなでたしといへど。その望かなふべきか。いかに。

この仲間。日ごとに午後二時より四時まで。技を奏するに。その小屋は常に空し。グザは樂屋の上に坐して。心ともなく「井オリン」弾きて。小屋の機敷を見卸すに。輕わざ師は白粉つけて粧ひ。紅衣絛袴。頭にこがねの環をはめて。蜻蛉がへりし。また倒に横木に懸りなぞす。又矮人は半身黄に半身青き肉じゆばん着て。赤き毛の生ひたる大頭ふりたて。卑猥なる戯したり。喝采を得るは。いつも矮人なり。小猿は顛ひながら。覺えたる技をなせり。鋸屑。瓦斯。橙の皮。猿など胸あたるき貞絶えず來りて鼻に入れり。暫くしては「井オリン」の月動くとゆるし。この時「さか〜。さかに

かしたる。」と足ずりして責むるは。例の「スピチット」
弾きなり。驚きて目を開けば。下棧敷の端に坐して。
これもぬふたげなる母とをもはず目を見あはせたり。
グザは力づきて又弾く。母は芝居のひまあることに
必ずこゝに來居たり。そをグザは我「井オリン」聞き
に來たりとのみおもひぬ。

ある日グザは。矮人モラロどものあらしひして。この
仲間の履を解かれぬ。されど母の小屋に入るとは猶止
まざりけり。

さる程に。四月某の日の晝過ぎ。風勁くふきて。雨窓
を打ち。いと寒きに。いまは業なくなりたるグザは。
あやしく傾きて。四脚よろめく机に兩臂つきて。兩手
の拇指を耳の穴にあて。素と母の翫びし古雜誌の怪談
に讀耽りて。戸の外にて冬と春とのをそろしき戰する
をも知らずありけり。そこへ遽しく入り來し母は。吃
りながら。「晩食は調へてあしれの中にある。わが歸
は遅かるべければ待たてたうべよ」といひき。
母の遅くかへらんといふは常のとなれば。グザは「さ
れば」と答へしのみ。讀みかけたる書をすてし。母の
顔見むとだにせず。
母は出でしゆきしが。まだ五分もたぬに歸りぬ。

グザ。「物を忘れたまひしか。」母。「さなり」。
母の顔はいと赤く。そこか。こゝかと物を捜すやうな
りしが。忽ち身を屈めて童の頭を抱き。二たび三たび
接吻し。又童の頭をわが胸におしあてし。「すこやかに
てあれかし」と口の裡にてつぶやきて出でぬ。グザは
何心なく雜誌を讀みたりしが。さらでだに印刷善から
ぬ紙の上に。きら／＼と光るものありて。字を掩ひた
れば。摩りのけんとして見るに。こは母の涙なりき。
グザはいつもの如く戸口に鏡をも掛けず。床に入りし
が。朝目醒めて見れば。母の床は宵のまゝなり。驚き
て一聲二聲「母様。母様」と呼びぬ。

童ながらも。此聲の母に聞ゆべきにあらざるは。明に
知りたれど。唯我胸の閉ぢたるを開かんとためにかくは
呼びぬ。さて獨起きて衣を着て街に走りいでぬ。
いと寒き朝なりき。融けたる雪に。水かさ増したる街
の溝は。朝風にさい波立ちたり。赤き旭日の光は。斜
に寺の窓を射て。灰色なる塗の内より。悲しげなる「オ
ルゲル」の音洩れきこゆ。グダは泣きいだして「母様。
母様」といよ／＼聲高く呼びぬ。マルガレエタは常に
子を愛するをば忘れざりければ。理なるべし。
童はかなた。こなたを見れど。物言ふべき人もなし。

母に棄てられて。よるべき身なりとは。此時悟りぬ。

ルエウ。ラアエスタインの子の物わかり早さよ。

この時瘦せて細長き手にて。ゲザが肩を押ふる人あり

見れば我側に立ちたるは知らぬ人にもあらず。マルガ

レエタが屋根裏借りたる家の二階に住める老人なりき

色の青さは。彼十字架にかけられたる耶穌の人形に殊

ならず。面に悲を帯びたるさへ。かれに劣らず見えた

り。「ふびんさよ。母に棄てられて。」

ゲザは覺えず下唇を嚙みて。顔の色赤くなり。此人

の手を振りおどしつ。人の憫を受くるつらさをこのを

り始めて覺えたるなるべし。老人は猶もやさしく童の頭

を摩りて。「母を憎しどな思そ。戀はかゝるものなり。」

ゲザはその顔打守りて「戀とは」と問ひぬ。

老人は醫咳して「病なり。熱ある病なり。これを煩ふ

人は美しき夢見て。きたなき業するものぞ。」

第四回

ガストン。デリレオと名乗れる此人をば。ルエウ。ラ

アエスタインにて誰も知りたれど。唯「トロオ井イゲ。

ヘエル」かなしげなる君」どのみ呼びぬ。年は四十と

五十との間なるべし。面は黄にて。ふるびたる象牙の

彫物に似たるどころあり。まだ黒髪長の長くすなはな

るを。額を掩ふやうにかきて。頰髯生やしたり。暑き

盛の外は必ず赤裏つけたる濃き藍色の外套きて街を歩

みぬ。

こゝへ遷りしは七月前なるべし。行違ふ小兒の頭を

摩り。女の前通りすぎるたびに禮をかねば。皆善き人

なりといへど。誰も交るものなし。

マルガレエタは驅落する前に。子供の行末のと。くれ

ぐれも頼みたる文一通。此人の戸口の郵便箱に投入れ

おきつ。常には手紙の入りたるとなきこの箱をことさ

らに撰びたるは。天晴人を識る才ありてのとならむ。

テリレオが妻は世をさりて。跡に残りし一人娘は。男

世帯にてをしへ育てむと難ければにや。佛蘭西へやり

て。家にあらず。此人は情深き性なるに。生涯おもひ

の儘に人をも愛し。人にも愛せられしとなければ。今

の淋しさ忘れたく。深く案じわづらふこともなくて。

ゲザを迎へ取らむと思定めて。「朝食に來よ」とやさし

くいひて。童の手を引き我家に伴ひいりぬ。

朝食果てし。デリレオは机に向ひぬ。都て世慣れぬ人

は益なき事にもすぢ立する癖あるものなり。今この童

のために教育の時間わりを作り。いまより十年が程に

此童の用ゐるべき品を考出して記すも。さる類ならむ。その隙に砒青染めの壁紙はりたる部屋を。あちこちと見廻りたる童は。帝國時代の道具の角張りたるど。ルイ。フィリップ時代の道具の曲くねりたるど。打交れる飾付のあはれげなるを。珍らしげに見つ。壁に掛けたるは嘗て一たび名高かりし畫工の作れる圖にて。「ア。モン。セラミイ(贈我親友)云々と題したる縁の文字猶讀まる。その側には黒欄に挟みし詩人某某の自筆あり。眞中には早がきの肖像一つあり稀なる美人の白き「アトラス」絹の衣きて。首に玉をつなぎし紐を結び。頭に小き冠を戴きたるなり。

「ゲザ。こは女王にや。」「デリレオはまだ物書きてありしが。面をあげて。」「そはガルチェリなり。」「ゲザは「さなりや」と答へしが。心には何ともえわきまへざりき。宜なり。まだ穉き身には。ガルチェリが當時。世に聞えたるうたひ女にて。妙藝の名は。無頼の噂と共に高かりしとを知らざりしも。

まばしありてデリレオは語を繼ぎて。「かれも女王なりき。うたひ女の王なりき。」
「ゲザは猶圖を打守りて。「おん身はその人を知り玉ひしや。」「デリレオは徐に。「かれは吾妻なりき。」

「ゲザ。」「さらば此女王はおん身をいたくかはゆがりしならむ。」こは主人をうれしがらせむとおもひていへるなり。
「デリレオはこの言葉や胸につかへけむ。顔打そむけつ。此肖像の前には大理石造の卓に載せたる青色の古花瓶ありて。絶えず新しき花束を挿したり。」

第五回

「迎取りてより程もなきに。デリレオは童がうまれつき音楽を善くすべきものなるを看破りたれば。アリユセルの音楽傳習所にて評判好き「井オリン」彈き某といへる師を頼みて。其業を磨かせぬ。その他の教は。デリレオ自ら授けたり。この人の説にては。善き教ありといふは。假名づかい正しく物書くとを覺え。廣く書籍讀むとなりき。

主人の骨折は一方ならねど。ゲザは兎角假名遣へてかきぬ。これとけうらうへにて著しく進みたるは讀書の方なり。デリレオが愛讀の書「エツセエド。モンテエン」のはや讀畢へて。その自作の小説「プロメトリス」に遷りぬ。此書は梓行の書肆に逢ざると十年。例の濃き藍色の外套と共に老たるものにて。一種えな

らぬ臭氣ありて。通篇ふるびたる社會改良的思想を寫出したる。その發端は「メエルヘン」に似て。その結末は讚美歌なり。

夕ごとに此小説を讀みきかせらるゝを。ゲザは耳敏て聞けど一言をもえ解かざりき。

げに二人は珍らしき一對なり。生涯に何一つまいたし
たるともなく。つか穴に片足ふみこみたる翁の忙さ。
身によの常ならぬ才能ありと自ら信じて。行末きはみ

なきやうにおもふ少年の氣の閑けさ。彼は果敢なき今
の世を厭ひて。斷えず三十年代の夢を喚びかへし。此
は經驗なき心に將來の樂しさのみおもひぬ。二人は疑

もなき空想家なり。されど最氣の毒なるは主人デリレ
オの方なるべし。

憐むべし。デリレオ。彼は世に所謂萬能の人なりしが
生涯何事をも得遂げざりき。音樂。繪畫。文學。經濟。

いづれも時の次第もなく究めつ。その頃社會改良論の
盛に起りしを見て。彼は又いたくこれを信じ。サン。

シモンが徒に従ひて。後にて結ぶ中單を着け。我名書
きし鉢巻を止めなしたりき。

人の胸には利サン。シモンの徒が分業の手つゝきをな
しゝとき。デリレオの受持ちしは。人のために靴を磨

き。又人に金を配るとなりといへり。げに彼はこの外
に使ひかたなかりしならむ。後にマダム。スタエルが
分派の母の位を辭せしとき。これに就くべき婦人を求
めむとて出でし三百人の組も。デリレオ居たりとい
ひ傳ふ。かゝる由なき事にデリレオは家財を失ひ。平
生の望は霧の如くに消えて。うしろめたきとのみ多か
りければ。まばし身を浮世の外に置きて。人にわれを
忘れられ。われも亦人を忘れんとおもひぬ。されど彼
も猶一つの望をば懷きたり。そは例の小説を世に公に
せむとおもふ果敢なき願なり。

いまの所にてデリレオが業といふは。樂譜寫して錢を
獲るのみ。これも昔ルッソオがせしなりはひなりと思
へば。賤しと嫌ふべきにあらざと。自ら諦めたるなる
べし。

二三年が程に。ゲザは美しき少年になりぬ。心さぞく
情深きとは。デリレオが教にて人並に勝れたり。され
どサン。シモンの殘黨を帥としたのめば。男らしき性
の闕げたるもことわりならむ。ゲザが傾のやうく醒
めて夢みる如くなりて思慮に整ひたるふしなきを見。
心あるものは行末覺束なしとおもひぬ。その仕事する
を見るに。熱を病める如く勉強するときありき。又い

たく倦みて一事だになさる時ありき。久しく忍びて。物をまどげむとする力は絶えてなかりき。教課の上に於ては。心にて悟ると人に優れたれど。記憶などの性を頼みては。よの常の音楽傳習所生徒に一等を輸くると多し。「井オリン」をしふる師は。これらの性質に心もどめず。只進歩の早きをのみ見ていたく喜び。かして。この好事家に引合せなどしつ。

ゲザが「井オリン」は。譜によりて巧に弾のみならず。をりに觸れて當座の曲をなすに。凡人の及ばぬところありと師は褒めたへき。

沈みたる性の人多きブルクセルにて。ゲザが破格の音楽は聽く人を駭かし。その「チゴイテル」種なりといふ。膺高きと共に。色黒き美しき顔を愛づるもの少からず。絶頂のほめ詞は必ず「コム。セエ。チガン」の語なりき。或る日ゲザは始めて音楽會に出で。公衆の前にて技を奏せむとするに。若き人の癖として。自尊心強く。時刻遅しとのみおもふを。デリレオ我事のやうに憂へて。食はず。寝ず。「もし仕損ずるとありても。心になかけそ」。どうあるさきまで諷めつ。

ゲザは此諫に腹立ちて。帽を額深く被ぶりて。走出で。足ぶみしてルニウ。ラアエスタインをゆきつ戻りつす

れば。デリレオは胸のみ痛めて。部屋の内を驅廻りたり。場の上に上るときとなりては。デリレオが心配いよいよ甚しく。いかに勸むれども座敷に入らず。樂屋の出口に立ちて息を凝らし兩手にて耳を塞ぎて居たり。「忽ちおそろしき響。おさへし手を洩れて。デリレオが耳に入りぬ。驚きて手を放ちたる老人は。初火事起りしかと疑ひしが。あらず。此響は幾百人の喝采拍手の聲なりき。デリレオは夢の如く。樂屋に跳り入りてゲザを抱きぬ。藝人は皆手を握りて祝し。前途の事さまざまにいひて褒めそやすを。世間知らぬ少年なれば。おほやうに聞きたりしが。前なる戸の俄にあきて。兩手さしのべ入り來たりし美男子の面を見て。流石のゲザも驚きぬ。その人はアルフオンスド。ステルニイなりき。

「今宵を過ぎで。あん身に近づきにならむとおもへば來ぬ。わがよるこびをも受けたまへ。」

ゲザは聞きて。今までそらしたりし頂を垂れて。慄ひて冷たき手を。此名高き「ビヤ」に握らせぬ。

第六回

アルフオンスド。ステルニイ。此名の響善かりしとは。

冷淡になりて。批評の眼に誇る今の人にはわからぬなるべし。當時の音楽世界にて。二三の「ピヤノ」弾きの占めたる名譽は。神も若かざるべく。其首に居りし人はステルニイなりき。ステルニイに逆上せて狂人となさまは。さながら時疫の如く。かれが技を奏する街々にはびこりぬ。後言するものは。此譽を藝よりは人品に依れりといひき。

ステルニイが人となり。所謂「ホム。ア。サクセエ」にて。品格善しといはるゝほど身だしなみし。氣象高しといはるゝほど物に拘らず。才ありといはるゝほど口悪く。非凡なりといはるゝほど輕薄にて錢づかい荒らし。顔かたちは美しきに。髪を新様に斬らせて。額を掩ふやうにかき。衣は僅に過ぎりたる流行の形を用ゐて。毫も藝人の癖見ゆる異態を成さず。父は佛蘭西の外交官にて。財産は二萬五千「フラン」ありと人皆知れど。この財産はかへりて伊太利の某婦人のかたみなりといふことは誰も知らざりき。

ステルニイが「ピヤノ」は珠の雨を降す如く。花を鎖に編みたるが如し。技藝の調和に深く心を用ひて。手を下すに及びては。つとめて卑しからざらむとを求めたり。さればこれを聴くに。いつにても一敵の誤りなけれ

ば。よの常の安りに指板の撃つものに似るべくもあらざりき。

匈牙利生れの名高き「ピヤノ」弾き某といへるは。嘗て之を誇りて「ステルニイが技は貴女子の指より出づる如し」といひき。此言は早くもステルニイが耳に入りしが彼は僅に微笑したるのみにて。舊に依りて其「ピヤノ」を撫づること愛子を弄ぶやうなりき。當時世人の耳は實に樂器を虐使する者に倦みたれば。この優しきふるまいは。却りて人を動かすに足れりしなり。彼が交る所は最貴きわたりのみ。されど同業のものをも。常に引立つるようになすと噂せられぬ。

ステルニイはまことに能なきに非ず。されどグザが始めて逢ひしときは俗慮臆に満ちて。名利をのみ事とする人なりき。その人をも世をも欺くに至りしは。後の事なり。世俗に推されて。餘りに高き礎に上りし後の事なり。この位を守らんとするには。別にせむすべなかりしなるべし。思ふにステルニイならぬ人を。かほど方に除えたる位に置かば必ず目くるめきて墮ちむ。人を引立つるは。ステルニイが得意のわざなれば。こたびもグザが手を握りしのみにては。足れりとせず。『オテル。ド。フランドル』へ次の日の朝來なば。行末の

ことをも相談せんと契りあきて。さて他の藝人にもそれ／＼に挨拶し。涙を頬に傳はせたるデリレオが手をも握り。つひには又グザが肩を叩きて去りぬ。今日の會主が催し、晚餐の席にては。グザは一顰をも食はず。又一言ももいはず。顔の色蒼ざめて。目はきはみなき空をのみ見やりたり。この未來の空には。無垢世界湧出して。金葉珠果の樹茂りあひたるも見ゆべく。刺なき薔薇の花分けゆけば。美しき女神福を賜ひて。月桂の梢は唯おのづから我前に打靡くなるべし。かの光を怯るゝ猛獸に似たる目は當時なほ青空を飛ぶ驚の眼にて。あそろしき夏の日をも憚らざりけむ。

第七回

能あれどまだ名を成さざる。若き藝人をもてなすとの厚きに。グザ深く感じぬ。二たび三たび引繼きて朝食に招かれ果はステルニイが「オテル」の置ものゝやうにせられぬ。或時は「井オリン」抱いて來させ。當座の曲にあはせて。我「ピヤノ」引き。こゝにてもステルニイは人の心を奪ふとの難からぬを知りぬ。或時は又共に語りて。童の言を可笑しどて高笑す。人に逢ふごとに

いふ。我「チゴイチル」の童見しや。珍らしきものなり。當座の曲を善くするとはシヨピンにも劣らず。唯其途おなじからぬのみ。きのふはシエ、クスビヤ引いだして。今日は「マルサラ」を「トカイエル」に劣れりといひき。(並に酒名)顔は喰ひつきたき程美し世の七不思議。又一不思議添へたりといふ。少年の「井オリン」引の評判は。早くフルクセルの貴族社會に高く。某の侯爵夫人はあるとき。グザがために夜會を開きしが。この折切角の評判。今少しにて泥土に委ぬべかりきとぞ。

その夕暮には。ステルニイが世話至らざる所なく。兼ねて自ら眺へて與へし漆靴穿かせ。白き襟飾の端まで手づから引直しておのれが車に乗せ。侯家のやかたへ伴ひぬ。怜むべし。グザが自重の心は。早く彼古き兵器にて美しく飾り。珍しき黒色の鎧二領を据えつけたる空關にて挫けぬ。公衆に對しては。獅子にも似たる勇氣を見せし少年。今は小供らしくもステルニイに寄りすがりて。僅に塵に進むほどに。侯爵夫人はステルニイを出迎へて。評判の世界の不思議とやらを連れて來玉ひしや。この夫人薄色の髮に。細き顔を圍ませ。並々ならず愛

相好く。また極めて活潑なるに。劇しき度の近視なれば。「ロニエツト」といふ柄つきの目鏡。片時も目より離すとなし。その世界の不思議とやらといひし聲の裏に。何となく可笑しとあもふ心を含みたるやうなるは。此社會の習にや。

「これこそ其人なれ。名はゲザ。ファン。ザイレン。いかにおもしろき名とは思召さずや。」とステルニイ答へき。さて言葉をつぎて。「この子はまだ人みしりする癖あれば。其心し玉ひてよ。」

夫人。「そはまことにや。そは面白し。總て藝人には自重の心あるこそ善けれ。其心は藝人に似合ふものなり。この子の目の美しさよ。」と例の目鏡にて見て。「侯爵もこの目をほめ玉ひぬ。殆まことの『チゴイテル』種のやうなり。頃日シエ、クスピヤを引いたりとか。われもいたく笑ひぬ。外の客來にければ。」ステルニイ。君はこゝを内のやうにしたまふとなれば。この子にも心あかせ玉ふな。是れぞ夫人が人みしりする重を扱ふ仕方なりける。

ステルニイはしばし童を片隅に置きしが。程もなく又引出して。男女さま／＼の密に引合せつ。ゲザは努めて人に臆せぬやうに見せたり。婦人は皆やさしくもて

なし。何につけても此少年の肩持つやうに見ゆれど。さればとて言葉をかくるものもなし。一座はゲザが目の前にて。ゲザが事のみ語れど。物いふものなれば。彼人々はゲザを石像の如くおもひたるか。さらば佛蘭西語解せぬ人とおもひ認りしかと疑はる。ゲザは猶目の前に立ちたるに。人に向ひてこれを譽め。これをながめ。遂には外の人に向ひて外の話するを見るも心悪き限ならむ。

ゲザは薄き氷を踏む心地して。寒からぬに裸へぬ。渾て身のめぐりのものを見るに。皆ひかり輝きて。又いと冷なり。上等社會に行はるゝ静なる聲は。大に耳を痛むる如し。實に人々の言葉は。ゲザが燃ゆるやうなる頬を打つと。軽けれど痛き雪片の如くなりき。

ゲザは泣かまほしう思ひぬ。世界の不思議と稱へられ。柄ある目鏡にて覗かれ。さまざまに評せらるれど。心ありて顧みる人なきに。

物語の中に。あの子はラアエスタイン街にて生れぬと云ふ人あり。婦人方口々に。ラアエスタインとはいづ

くの街にか。ラアエスタインとは何の事にかなどいへば。そを婦人の方々に聞えむは憚ありと答ふ。そは又實にや。されど善き育の見ゆるはいかに。げに卑し

きものらしき處絶へてなし。唯「チゴイテル」に似たるのみなど婦人いひあへり。これを聞くグザは喉を緊めらるゝ心地しつ。

「今宵は君が聲を聞くと出来ぬにや。」と婦人幾人かステルニイに迫りて問ふ。

「我聲をいかでか。我は今宵世話役の積なり。それさへあるに頭痛みて耐へがたし。」

今やグザが技を奏すべき時來たりぬ。胸の動悸は激しくなりて。頸のあたりまで響き。常の我をばいづくにか失ひて。指を絃上加へしどきは。唯是れ衆人の前に推出されて。遽に度を失ひし田舎人のやうなりき。

メンデルソンの「グ。モル」調の半ばにて。忽ち曲を忘れ。慌てゝ絶えし音を繼がむとして。聞きぐるしき過をなし。やうく弾むはてぬ。かゝる拙き技は。げに珍らしかるべし。ステルニイは失望の色を面にあらは

し。グザは地の底にも入りたく思ひぬ。拍手の聲かきこゝに聞えざるにあらぬぞ。そは毫も聞かざりし人ど。聞けど解せざりし人どのみにて。多くは唯肩を聳かして。「ステルニイの人に心酔する可笑

さよ」といひき。

ステルニイはグザが斯く拙き曲を聞かせしと。前後に

無きを明して。あはれなる少年のために無實の罪を雪がむとおもひしが。人々は唯「我等はあん身を咎めむと思はず。あん身は人に心酔し玉ふ癖あれば。」とのみ云ひて取上げず。

一座ははかなき物語し。笑ひ。嘗むるどもなしに酒茶を嘗めなごしたりしが。美しき貧婦人一群。衆人の使に立ちて。ステルニイに一曲を求むるほどに。こなたは心よげに受引きて。勝を未然に知りたる面の色晴やかに。「ピヤノ」に向ひぬ。

さて曲を終りて。グザが傍に歩寄り。「我見よ。心を鎮めて。我が外に聞く人あるをしはし忘れ玉へ。さらば先に我に聞かせしとある當座の曲に似たるもの。出来ぬとよもあらじ。こは汝が身の上にもかゝるとなり。

我も汝が譽めらるゝを聞きたきに。」
此言葉にグザは自ら奮起して。「君が辱にならぬやうに。一曲を試みでは止まじ。」と口の裡につぶやきしが。

面の色は眞着になりて。身うち慄ひ。手に「井オリン」取りし時。眼一たび輝きて。忽又黒き睫毛の背にかくれぬ。

その時童が目の前には。火の雨降るやうに見え胸の中には欲うづまき起りて狂へる如く。戀ふる如き物の音

耳を衝きたり。あはれ此曲。夢中にか成りし。さらずば。遠き父のふる里より木がらしや吹送りし。さらずば。悲しげなる救世主の見御し玉ふ。あやしき街の戸口にて。我見を眠らせむと歌ひし母が。夫より傳はりたる節々を。また此童に傳へやしけむ。

唯聞く。ゲザが手中の「井オリン」は。乍ち歌ひ。乍ち泣けるを。匈牙利の「チゴイテル」ならで。かゝる聲音を出し得るものあらむや。人を酔はしむる節奏。溢るやうなる音の曲折。情と樂との亂狂へる風雨雷電。さて最後の一聲は虚空に向ひて放ちたる歎呼なりき。

ゲザは目をみはり。息を凝らして立てり。彼は自ら力限の杖を奏せしを知りたり。彼は耳を歌てたり。されど公衆の前にて受けし如き喝采は。此上等社會に無きものにて。唯秋風枯葉を捲く如き聲座に満ちて。遙か後の方より。面白し。珍らし。人の猶くならず。「チゴイテル」。などいふ語聞ゆるのみ。

この有様にゲザは頭を低れしが。忽黒雲目の前を飛ぶ如き心地しつ。ステルニイはさし寄りて。軽く肩を打ち。好し。好し。それにて名譽は回復したり。」と慰め

りとの玉ふや。」
ステルニイが此言葉はゲザには聞えず。ゲザは唯ステルニイが手に熱き唇をおし當て、涙をはら／＼とこぼして泣きぬ。ステルニイは彼がためには只神の如くなりき。ステルニイは大いなる幼児。早や止めよ。と慰むるを。人々打見て。ゲザが技にも増して貴みぬ。或る日ゲザは「シメル」とは奈なる物ぞ。」とステルニイに問ひかけぬ。

こは晝前の事にて。佛人ポアドレエルが著したる「悪の花」といふ書を解せぬながら。躑へし居たるゲザが口より出でし問なりき。ステルニイは日本絹の黄なる寝衣を衣て。その様大なる王蠟燭といふ。草花めきたるが。書きかけたる手紙をおきて。伸をなしたるさま。顔の色の蒼ざめたるも際立ちて。十五年來一夜も穩に眠らぬ人と知られたり。

「シメル」とは奈なる物ぞ。」とゲザ再び問ひぬ。
「なに。『シメル』とか。そは羽ある女怪の名なり。」とふりかへりて答ふ。

「さなりや。」と臉を低れて。暫し考ふるさまなりしが。又目を開きて。「さては却を歴たる女怪なりと見ゆ。」

「まづ左様のものならむ。」

ステルニイは足を温めむとて、「カミン」爐の前に椅子を寄せつ。「堪へがたき寒さかな。そこなる『シヤルトリヨオゾ』を。それにて善し。修行を積みし女怪とおもふも可ならむ。常の女怪は人の腕を持ちたれば。それを枕に樂みて身を滅すものあり。『シメル』の手にはおそろしき爪ありて。人の心を掻裂くとあり。常の女怪は人を沼に引入るれど。『シメル』は人を天に招きのびさんとす。天は達しがたきものなれど。沼に入り。泥の中にはまりては。なかく樂しきとあるものなり。限なく樂しきとあるものなり。されどそは汝がまだ知らぬ境なり。」とグザが耳をつまみて引きつ。

グザは呆れたる面持して聞居たりしが。ステルニイが講釋は半ば分らざりしなり。「されど我等の中。天に達するものなきにはあらざるべし。美術の天に。『アルルラ』(樂土)に。『バンテオン』(人を神に崇めたる祠)に。唯々早く途に上ぼるをこそ善しとすべきならめ。かく言ふは。多く讀みて少しく解したる若き人の口吻なるべし。

「さなり。天に達するものなきにしもあらず。」とステルニイは微笑しつ。「ミクランシエロ。ラファエル。バエ

トオフェン。」と童は數へつ。

「シエ、クスビヤ。ミルトン。モツアルト。レオナルド。ダ。井ンチ。」とステルニイは高く笑ひながら言ひつぎたりしが。「されど天に達するには。非常の力なくては協はじ。又天にあらむとせば。その瀧氣を吸ふために。一種の肺を備ふべきものならむ。」

ステルニイは斯くいひて軽く欠しつ。彼は嚴しく「シメル」(不朽を謀らむとする妄想)を遠ざけて常の女怪と遊びたはふれ。その女怪に心を奪はれざる一人なりき。

グザは猶心に落ちざる節ありと覺しく。「さて『シメル』には昔羽あるものによ。」と問ふ。

「否。羽なきもいと多し。されどそは怖るゝに足らず。人を功名の道に誘ふなどは。そのえなさぬとにて。彼等は唯四足を泥に植ゑて。月に向ひて吠ゆるものぞ。」

「されど。」
猶問はむとするグザが口を遮りて打笑ひ。「我學問は早やこれ迄なり。猶疑あらば。呼鐘鳴らして。會話辭書取りにやるべし。」

第八回

七年ばかりたちて。五月半ばに。ゲザ久し振にてブリ
 エセルにかへり來ぬ。ステルニイが勢力にて。官費と
 貴人の贖金とを得たるゲザはパリにゆきて。當時名高
 かりし師を訪ね。「井オリン」を學びぬ。パリにては。
 學びもし。又遊びもして。人に譽められ。又妬まれ。
 三鞭酒の杯擧ぐる手つきを覺え。禮を守ざる男を憎む
 婦人と禮を守る男を惡む婦人とを見分る術を得たり。
 ゲザがはじめての旅かせぎには。名高き伊太利の歌姫
 と。それよりも名高きメエレンの座元とを同行とし
 たりしが。途々に桂冠を得たると幾度といふとを知
 らず。ニツツアに至りしとき。歌姫の事にて。「井オロ
 ソ」(膝胡弓)彈きの男と争ひ。遂にこれに決闘を
 言込みて座元を辱めつ。
 されど座元マリンズキイはかゝる瑣事を心に留めず。
 實利のみ心掛くるものなりければ。二月後にパリに
 て亞米利加ゆきの一行を募りし時。再び巨額の給金に
 てゲザを雇はむとせしに。ゲザは懷中に蓄へたる。前
 度の旅かせぎの利益金數千「フラン」を頼みて。技を賣
 らむよりは譜を作るこそ我本意なれ。と答へき。ゲザ
 は當時二十四歳。この齡には已に不朽の業をなし、樂
 人も少からぬをゲザが公にせしものとは。十年ばか

り前に印刷せしめし「レエウリイ」(夢曲)あるのみなり
 き。此曲は白人著作の習として。美しく仕立て。首に少
 年作者の像を附けたる一冊子にて。フオオブアル。サ
 ン。ジェルマンにて家ごとく購はれ。それより外へは
 出でざりき。
 その後紙に上しものは少からぬと。これを完うせし
 となし。さるを體自ら著作に富めるやうに思ひしはこ
 れを完うせむと思立ただにせば。直ちに戒らむと信じ
 ければなり。曾て筆取りて紙に臨みしこと屢ばありし
 が。さあ、の趣向亂れおこりて捉ふるに由なかりき。
 唯餘閑だにあらば。事は成るべし。されど閑といふも
 のは。パリにて價貴き貨物なり。貴人ならでこれを得
 むと難からむ。この時想起しは「ブリユセル」なり。か
 の「ゴチック」風の寺院高く聳えて。隘き街は曲りくね
 り。加特力教人を酔はしめ。草木繁り生路塞がりたる
 ブリユセルなり。ブルユセルなつかしと思ふ心止みが
 たくて。ゲザは途に上りぬ。
 時は五月半ばなりき。こはブリユセルの美しき時節な
 り。白は雨と久しく戦ふとなく。唯折々小せりあひ
 をなし。大氣を淨め。こがね色したる靄は虚空に滿ち
 て。遠方の見えざるなりたる街道を夢物語のやうに包み。

「サント。ガヂウル」寺の「ゴチツシ」風の石塔のめぐりに光まばゆき彩雲を起し。公園の青草に「ブロンド」なる面紗を被せたり。げに怪しきは此濕りたる澤。此金色の霧となりたる日影。此春ごとに灰白なるブリニセ川を包める佛頭光なり。

園中の石像は今や藁の帽子を脱ぎすてたり。日光は彼六月初旬に失せぬべき春の藁を濡く心地よく吐きたる木々の若葉の間をすべりぬけ。中に横れる枝の輪園として色黒きあたりに白かね色の輪廓を作り。十圍もあるべき巨幹に澤ある大光斑を印し。おもしるげに露を帯びたる草葉の上に落ちて。透きとほりたる木の葉の影と捉迷藏の戯をなしたり。

オラニエン太子が家の前には。白きと薄紫なるといり糺りたる。接滑木花ゆたかに頭を掉り。御苑のわたりには萱花の如く碧き「ロドデンドレン」咲亂れて海をなしたり。この上を有るか無きかの温き風。花の香に飽きて吹けば。これに觸るゝもの眼を催さむとす。是れ北國ながらの「シロツユ」風なるべし。

グザはガアル。ドユ。ミヂイより「フェウルツア」を横ざりて「ラエスタイン」に向ひ。すこやかに歩をばこび來しが。物として面白からぬはなく。皆故人の如く。我を

迎ふるやうなりき。暫し行きては立留りて。後を見かへり。獨り打笑み。又行き又駐まり。殆世を忘れたるやうなりしが今モンタゴ。ド。ラ。クウルを曲りて「ラエスタイン」街に來ぬ。この時胸を緊めらるゝ如き心地して。何となく苦しく。踵を旋らさむとあもふばかりなりしが。却りて足け進みぬ。遠見には濕ひたる金光かゝやきて。此中古建築法の痕を留めし街と。黒き寺壁に倚りかゝりたる救世主とは。金地に畫きたる如し。「デリレオ」君は居玉ふか。と門口を洗ひあたる

(こゝには珍らしき暇費しならむ) 婢に問ひぬ。「フラミヤ」語は久しく操はねば。唇を出づるといと難かりき。婢は驚きて面を擧げしが頷きぬ。グザは胸を騒がして門口に入り。足音高く梯を登り。戸を敲けど答なし。入りて見れば。緑なる磁石の壁紙昔のまゝにて毒氣を吹く如し。されどグザが養父と二人にて住みけるをりに比ぶれば。室内何處となく清らにて。媚を呈するやうに見えたり。人を酔はせ。人を眠らしめむとする香氣に襲はれて。向ひを見れば。ガルチエリが像の下なる。缺け損じたる花瓶に。美しき瞿粟の花束をいけた

り。こは「パチオ。ト。ニイス」とて名高き大輪の花なり。

此間の戸はあきたるに。次の間の建添へ。硝子張の中に。圓き卓を前にさし向ひに坐りたるは。ガストン。デリネオとそが娘となり。

グザはあどろきなながら。娘の姿を見て。暫し我を忘れわたり。かゝる輪廓正しき顔貌は。伊太利にてこそ見しともあれ。頭は小さき方なるが。希臘形の強き兩肩の上に据わりて。蒼白く變化少なき面に。黒く光れる目。燃ゆる如き唇。際立ちて附きたり。

この子はまだ十七なれど。北國の少女の常なる角張りたる態度なく。身うちすべて豊に。人を酔はしむる氣を吹きて何處となくませたり。一言にていへば伊太利の「モルヒテツツア」(肌の軟さ)を具へたり。

グザは少女の姿に見どれて立ちたるを。デリネオ頭を擡げて見しが。領さし伸べて。日に向ひたるやうに瞬する有様に。グザはほゝゑみて一歩進みぬ。

「グザならずや。此醫未だ畢らぬに。悲しげなる君は養子を抱きて。彼も此も喜の涙を澀きつ。しばしありてデリネオは。グザを少し推しのけて。つくく其姿を見。また引寄せて抱き「いかに暫く又ここに留まるべきや。」といふ。その聲は慄いぬ。グザ。「父上。ちん身の許し玉ふ限。ここに留まりて。

靜に著述をなさむとあもひ侍り。されど我が居るべき場所も。はやあらじと見ゆれば。近きところに一間借りべし。また娘の方を見て。「妹とはまだ近づきにならず引合せ玉へ。」

デリネオ「げに。さなり。アンテツト。こはかねて噂せしグザ。ファン。ザイレノなり。中善くせよ。グザ。あん身は妹に接吻一つせよ。」

夕飯果つる頃。灰色のかはたれ時は。ブリュセルの金光を鎖し盡し。僅に街燈の火ありて狭き紅を溝の水面に印し。又寺窓の色硝子を射るあるのみ。

グザは彼綠色の室にて。最軟なる椅子に倚り。デリネオに著述の見込を話しつ。アンテツトは黙して聞けり。獨りその大なる目は闇にかゝりたり。

グザが言は極なく長けれど。デリネオは謹みて聞き。唯をりくそはいと面白からむといふのみ遠き市の賑は。微なる子守歌のやうに此ラアエスタイン街に洩來り。夜に入りて罌粟の香氣次第強くなり。時として冷き白石板の上に。枯れて落つる花瓣の音聞ゆ。

第九回

罌粟の花は溝に棄てられ。さま／＼の花束ガルチエリ

が像の前にて枯れぬ。五月は六月になり。六月は七月になりぬ。グザはいまも猶夜な／＼わが著作の見こみを養父にかたり「メロヂイ」二つ三つ「井オリン」にて彈いて聞かせ。合歌のどころの見こみはこうと「ピヤノ」にてまねその度ごとに面白からんといはせ。當座の曲多く作り。夢ごころにて精神のうちに響く怪しき聲を聞き。さて何一つ仕出さへりき。

グザはガストンが家の向ひなる洗濯婆の住居の一間を借りて。居どころと定めたれど。ほど／＼朝より夕までガストンが家に來て。アンテツトどもに面白き時をすごしつ。

ガストン。テリノオはいまあのがために役を見付て。めづらしくもこれに名を署せしが。これは娘のためを思ひてならんか。役といふは芝居の書記にて。その外にある新聞の雜録を受持ちたり。それにて事足るほどの金をば贏けつ。いまこの家に入るものは。貧しさをば見で。みだりなる満足のさまを見るなるべし。これヲ

アエスタイン街の富なり。
このやり放しの中にてグザは快く日を送りつ。かれがためには坐りごころよき椅子一つありて。その兩側の手すりに腕をもたせて。未來の望を語り。その背に頭

をもたせて。「カボラル」烟草の煙のゆくへを見やるはをもしらく。又かれが臨む食卓の上には。いつも一瓶の好き「ボルドオ」酒あるぞ嬉しき。

グザは何もなさいるゆゑ。これを掩ふにたよりある長き食事を悦べり。咖啡飲むときには。アンテツト向ひに座りて。をり／＼一匙づゝ取りて飲むとあるを樂

どしたり。また日を消すには。はや世の中にいひ傳ふる人なき樂譜を涉獵り。名のかくれたる詩人の作りしものを求めなす。その中にて氣に入りたる句を得たるときは。誇大なること葉にてこれを譽め。二たび

三度。甚しきは二十度もアンテツトに讀みて聞かす。彼は一語も佛蘭西語を解せざる門外の婢によみて聞かせても善きはづなり。されど門外の婢は。アンテツトのやうなる美しき笑顔なきをいかにせむ。さて此句を新に譜に作りて。舊びたる「ピヤノ」に上ぼして彈くに。

この器は血氣の少年の作りし激しき曲を。慄ふ聲にて導くさま。老祖母の墓は片足ふみ入りて戀の歌をうたふ如し。

かゝるをりにはアンテツトはその句を歌はせらるゝことあり。アンテツトが聲はうるはしき「コントラルト」調なるに。グザよろこばせんとて。力を極めて歌ひぬ。

グザは飽足らぬ面持して。いさ少し様子がありたし。いさ少し氣を入れよ。といひ。指尖にて小女が胸の邊をさして。こゝに何をも感ぜざるかと。繰返して問ふ。小女に打笑みたりしが。忽ち赤くなりて面をそむけつ。

ガストンは始よりグザと娘とを兄妹の扱にしたれば。何の面倒もなく。治りきはめて善かりき。父は娘がグザがまはりにて立働き。かれがためにさまぐの用を足して悪き癖をつけ。をりぐ大なる目にてかれを見るに心づかざりき。

グザがアンテットに對するさまは。初極めて冷淡にて。その優しさは兄の妹にやさしきに似たりしなり。七月の末には冷淡の度いつもよりも甚しく。グザは少しラアエスタイン街を忘れて。當時「ガレリイ。サント。ユベル」の芝居に居りて。ブリユセルに倦みたる巴里の女優に交りたりき。

アンテットはこのさまに。相貌變るまで妬みしが。グザは何ゆゑに少女の様子の常ならぬか知らで過ぎぬ。ある日グザは少女が瘦せたる頬の邊を優しく摩りて。「奈何せしか何ゆゑに悲しげなる。街の空氣のあまりに悪しきためならむ。父上。この子をしばし海邊へ

やり玉はずや。」ガストンは肩を管かして。「残念なれどわれはさる費を出すに能はず。」と答へき

グザは「なに。費どや。われも已に久しうあん身等が悪いあづかりたれば。夫ばかりの事は怎にもせむ。」といひしが彼は女優「マドモアゼル」イルマに贈りし金の頗る多かりしを忘れたるにて。この時急ぎて我室にかへりて。銀行紙幣二三枚取出さむとおもひて見れば囊底唯二十「フラン」の貨幣一つのみなりき。暫しは呆れて頭を掻きしが。忽ち又打笑ひて虚になりし財囊を養父に持てきて見せ。「いまこそわが高慢らしき言を笑ひ玉へ。わが富はこれのみなり。さはいへ。暫しのことなり。我頭にも我手にも黄金の源はあるものを。唯仕事にかゝる興に來は。唯少しの熱だに起らば。あん身は我吟歌劇曲の嘲笑のおきどころを知らずや。」

八月の末女優イルマ。ブリユセルを去りぬ。グザが心は鬱々として樂しまず。この心は業に就く緒となりぬ。

彼はある朝例の著作の熱を得たりとて。譜を書くべき紙を陳べ。手にてこれを平にし。鶴「ペン」を截り。屋根裏の一室に唯一つありし脚あやふき小机に肘をも

たせ。一行かきては忽ち又消し。欠伸し。みづから苦しさに堪へぬやうなりしが。暫し散歩したる後にこそとて公苑に出で。時々精神にひやく聲にきよはれて歩を停め。また行人につき當り。物思はしげに椅子に腰掛けつ。彼は忽ち左右の顛顛のあたりを押へつ。此時一曲ありて心中を流來れり。

グザは急ぎて室に還り。只管書きに書いたり。ガストンが役所よりかへりて。二度目の朝食をなす頃は。はや過ぎて次の食の時となりしが。グザはまだ頭を譜紙の上に低れて書けり。紙の散りたるは。二ひら三ひら床の上にあり。戸を叩く人あれど。知らぬば答へず。ガストン入りてわが子。けふは何とてひねもす顔見せぬぞ。病めるにはあらずや。

グザはあやしき夢を喚覺されたる如く。眼を睜りたりしが。「否。仕事するなり。」と答へき。その面は眞蒼にて。その手は陳へたり。デリレオは強ひてすゝめて。一時なりとも業を停め。何にても少し食へといひき。グザは澁りながら引かれてゆき。食卓に向ひしが何一つ食はず。何一つ言はず。唯一どころを見詰めたるさま。怪しきものを視る人の如し。食後には此間の中を歩みて。聯絡なき曲をつぶやくやうに

唱へ。をり／＼古き「ピヤン」の木端を押へて。唇を堅く閉ぢたるまゝにて。音一つ發するは。ある大なる「フィナアル」の終るところなるべし。また「オルケステル」の群を指揮するまねして。手を空中にふり動かす。遽に床を強く踏みて。旨し／＼と叫びぬ。

デリレオはむかし詩人。樂人など多く交りしとあれば。これを止めもせず。彼は狂人。不幸に陥りたる人その外著作をなす人に對する心にて。グザをやさしく扱ひぬ。されどアンチットはグザが心知らぬば。いつも鄭重にもてなすには似ず。いま聲高く笑ひしを。グザ又いつになく腹立て。善く休み玉へ。と輕くいひて去りぬ。此夜はグザ。曉までその「オペラ」を作りき。これより數日の間はグザ食はず。眠らず。面色變りて餘所目には樂しからざるやうなりしが。みづからは言ふにいはれぬ愉快を覺えき。デリレオは。「あまりに働きて精神を傷ると勿れ。聲を失ふやうに空想をも失ふことありといはずや。唯程を守れかし。」と諷むれど。グザは美しき頭を打ち振りて。目をなれば閉ぢて笑ひぬ。おもふに養父がいひしことを耳に入らざりしならむ。

ある日グザは喜はしげに聲を擧げ。第五齣を造畢りし

が。第三第四の兩齣はまだ形もなきに。空想忽ち絶えぬ。天馬は蓋しかれを抛落したり。天馬はあまりに鞭打たるいどきはかく情なきものなりとぞ。彼は抛落されて下界にあり。さきに見し上天の境はいま烟のごとし。

頭痛山しく。沈鬱の症となりて見れば。さきに作りし曲遠に厭ふべきものなりし如く。いまは前に善きところのみ見し代りに悪きところのみ見て。これを古人の作に比べ。齒を切りて額を擧てり。

グザは今あのれが作りしものを渾て過激にて可笑しきやうに思ひて。唯極めて冷淡なる樂を弄ひ。好みてバハが「シヤコンヌ」を弾き。シヨビンが「ノツツル」は我神經を傷るといへり。

彼が態度は重き病をわづらひて。今將に治に就かむとする人の如く。衣は緊りなく。膝はふらくとゆらぎ常に縁いろの部屋之最暗き隅に坐して。頭を手掌にもたせ。目を見詰めたるまゝ空しく時を過しつ。

あるときあのれが作を「井オリン」にて試みしが慌たしく樂器を擲ちて。例の椅子に倒れかゝり。自ら爪を噛み。忽ち聲擧のやうに泣きいだしぬ。アンチットはこれを見て耻かしげに近寄り。かれが頭を壁で「グザ

オある人はかくまで悲しきものにや。」と問ひぬ。グザは聞きて少女を我膝の上にかき抱き。髪に目に唇に接吻するを。少女ははじめ驚き。中ごろはうれしく。後にはまた耻かしくなりて避むとす。グザは少女が身をばゆるしたれど。手を取りて離さず。やさしき聲して。「アンチット。おん身はわれを嫌ひ玉はぬにや。おん身は我妻となり玉ふべきや。今どはいはじわが名高き樂人となりたる上の事なり。われに力はな

くども。お身を力にて名高くならむ。」少女は赤うなりて。「わが如きあろかなる少女を何どかし玉ふべき。」とささやくに。こなたは戯れて。「あろかなりとも。わが心に協志を奈何せむ。」といふ。

少女は頭を垂れてグザが手に接吻し。身をずらして。グザが椅子の下なる低き踏臺の上に坐りぬ。ガストンは還りてこのさまを見。二人がいひなづけを許しつ。

第十回

グザがアンチットを愛づる心は日にげに深くなりて。アンチットはいまゝでの耻しげなる様子を棄て。戯れに抗抵する如き癖を見せたり。

最早二人を兄妹と見做すべきにあらねば。テリレオは
グザと少女との交際を夕のみとし。その外日に一たび
共に散歩するを計しつ。

樂しきはこの日ごとの散歩なり。アンテツトは好みて
人氣繁き街を歩み。飾店の前に立駐りては。「おん身
名高き人になり玉は、あの飾買うて玉はれ。」などいふ
その飾といふ美しき紐。こがね色の靴などなれば。グ
ザは心に惹みて翌朝のそみの品に短き文を添へてやり
なです。かゝる費はこの頃人に樂を教へて得らるゝ
なりけり。

グザはまた好みて少女を引きて。人げなく淋しき公園
にゆき。霜月の風物凄く。木々の梢を鳴らすとき。浮
世を忘れて。唯夢の如くならび行けり。をりく道に
大なる水たまりあるときはグザあたりに入なきを幸
に少女を抱いてわたす。少女はグザが胸に身を寄掛け
てかれが餘り氣抜けしたるやうなるとき。手に力を入
れて呼醒し。「何か少し話して聞かせ玉へ。」と請ふ。こ
の時グザ濕ひたる目にて少女が面をみ。「おん身が愛ら
しきとよ。」とのみいひ。繼ぐべき言葉を知らず。

グザは戀に物みな忘れ。「退屈極なき情人なりき。この
頃彼はまた著作をはじめ。前のやうに奮ふとはなけれ

ど。勉めて業を取りたり。「オペラ」のかたは暫く打ち
置きて。今殆ど作りおはりしは。ダンテが地獄の段を
「オラトリウム」やうの譜にせしものなりき。

第十一回

十一月の末つかたの事なりき。或る夕暮グザ忙はしげ
に緑いろの部屋に馳入りて。父上。アンテツト。と呼
びぬ。テリレオに何事ぞ問はれて。ステルニイが手
紙届きしが。次の週にはブリュセルに來むと書たり。
といふ。アンテツトは望を失ひたる様子にて。「あまり
慌たしくのたまふゆゑ。富の大籤引得たまひしか。
さらば月に五千『フラン』にておん身を雇ふものあ
りどの事ならむとおもひしに。」
グザが不平の色を見て取りし養父は優しく。「娘が心づ
きななき言葉をあしうな聞きそ。ステルニイといふ人を
奈何なる人とも辨へねば。おん身が喜をも解せざり
しならむ。此夕グザは少女にステルニイが上悉しく語
り。おのれが十年以來の交際の事をも告げき。

第十二回

少女は解し得たり。ステルニイといふ樂人の聲價いか

なるかといふことを。今はゲザも少女が客を迎ふところの冷ならむ憂へざるべし。これもことわりなり。今はブリユセルの府内。到る處ステルニイが名を聞かざることもなきやうになりぬ。新製の菓子。新形の漆靴。又は手拭など。皆ステルニイが好むといひ。小見の遊にもステルニイが合奏のさまをのみ見つ。當時の小見のかゝる遊をなしは。今の世にて「コンシユル」とマレンゴの役を演ずるに同じかるべし。

アンテツトはこの頃唱歌ならひに行けり。これもゲザが少女可愛がりての奢なり。アンテツトと共に唱歌習ふ少女等は唯ステルニイが事のみ物語りぬ。教子の一人は「モンテユ」の樂長を伯父に持ちたりしが或日ステルニイが伯父の家に忘れおきたる手袋なりとて。替古所へ持て來しを人々微塵に引裂き。争ひて守袋に收めつ。この鞆草のきれを二十年間胸に掛けたる少女もありきとぞ。

ステルニイが名譽は當時其極處に達したりき。その最後の魯西亞行は。いにしへの戰國の民が凱旋の王を迎ふる如く。オデッサに入りしときは祝砲轟き。モスクワに入りしときは大學の書生群をなしてその車を迎へ。はては車前の馬を脱して手づからこれを牽き。街

の兩側の窓よりは。婦女の撫ちし花束。雨より繁く。ベエテアルブルクに入りしときは某の大侯の夫人おのが宮居を明け渡して旅館にせしめ。最負の人々より贈りし裘。桂冠。金剛石嵌めたる環。「カヤヤ」盛りたる大樽など許多の外に。純金の「サモワル」(茶器)さへありきと聞えぬ。

ゲザはこれ等の噂を洩らすことなくアンテツトに語りさかせしが。魯西亞の貴婦人が争ひてステルニイを寵し。渠に卻けられしゲオルグ家の侯爵夫人は。興行の最中に短銃にて自殺せしことには及ばざりき。

ステルニイが着きしときは。ゲザもガルド。ド。ノ。ノ。オルといふ停車場まで出迎へしが。ブリユセルの民の過半の内外に集りたれば。唯一握手を得たるのみ。その時ステルニイは「オテル。ド。フランドル」に投ずる積なれば明朝來よといひき。

翌朝「オテル」に往きて見しに。ステルニイは机に向ひて。左手額を支へ。右手筆を握りて。塗抹したる跡多き樂譜の稿をながめ居たり。顔は鋭くなりたり。斷えず上流の人と交はりしためにや。神經質を帯びて際立ちたる動作。器械的に人を敬ふ癖など。渾て一種名狀しがたき容體を養ひ得たりと見ゆ。想ふにステルニイ

は今眼を開きたるまゝにて眠るやうになりしなるべし
鬼の如く。又宮中に伺候する人々の如く。

ゲザが一間に入るを見て。こなたへ振向き。「恙なかり
しや。又相見ること嬉しけれ。いつもあん身と目を合
はするときは。若やぐやうなる心地す。あん身が餘り
に久しくプリユセルに留まりたるを聞きて。恩感ふの
みなりき。何事ありての滞留ぞ。今頃はマリンスキイ
と海山のあなたにあるべきに。」

ゲザは面を赤めて。吃りながら答へき。「彼約束をば破
りたり。この身を縛られむも望ましからざりしゆゑ。」
「彼約束をば破りて。怠惰ものにやなりたる。」ステル
ニイが我子に對するやうなる待遇は故の如くなりど知
るべし。「さてもあん身の肥えたることよ。少年の技術
家には似つかはしからぬことなり。われを見よ。骨と
皮とのみ。今は何事をかなしたる。目的ありや。奈何。」

ゲザ。「怠惰ものにはならず。人に樂を教へて。忙しき
目を見る身なれば。」
ステルニイ。「なに。人に樂を教ふどか。不思議なるこ
とを聞くものかな。それよりはマリンスキイと亞米利
加へ往きて。金を掘るかた遙に優りたらむに。」井オリ
ン「ならふ少女に美しきは少きものを。あん身が業は

そのみにはあらじ。教授時間の外は何事をかなした
る。」

ゲザ。「譜を作るのみ。見ればあん身もあなじ業をなし
玉ふやうなるが。」
ステルニイは。「否。我境界にては。譜を作らむこと思
ひも寄らず」と答へつゝ忙はしく草稿を疊紙の中へ收
め。明けても暮れても。汽車の一室。合奏の座敷。か
かる境界には早や厭果てたり。唯欲しきものは。四週
間ばかりの休暇なり。馬鈴薯添へたる「ピフステエキ」
田舎の空氣。花畑と心おかれぬ友一人。」

この時戸を敲く音して。従者入來り。何事かいはむど
するを。「ステルニイ遮りて。「われは不在なりといひし
に。」
従者。「されど例の伯爵の君なれば。」
ステルニイ。「没分曉漢かな。われは不在なりといはず
や。客は何人にもあれ。」

従者の退くを待ちて。ステルニイ不興げに。「あのどほ
りなり。十五分の間には。十人の客に逢はねばならざ
これ程五月蠅き生活は少かるべし。その上。いつも同
じ職して。いつも同じやうに喝采せらるゝも苦しき
限ならずや。」

「いかに喝采の聲に厭きたまひしとて。一たび口笛の音聞かむとは願ひたまはじ。」とグザ笑みつゝいひしにステルニイ少し面色變はりて。先づ少年の顔をながめ次に樂譜を収めたる疊紙を見つ。されど少年の顔は常の如く優しきに。ステルニイが疑忽ち晴れぬ。暫しありてグザ遠慮なく言出づるやう。げにおん身が世わたりのあまりに忙しくして譜を作る暇なきは惜むべきことなり。おん身の出しものは。今まで書更の外なかりき。何にても少し見せ玉はずや。」

ステルニイは頼に皺を寄せて。餘り他人には見せたくなし。公にせぬうちに匂失せなば。いと惜しかるべければ。」

グザが面は朱を濯ぎたるやうになりぬ。「餘り他人には他人には。」

ステルニイは聲高く笑ひぬ。「昔の癖はまだ失せずや。おん身を怒らせむどはおもひ掛けざりき。あれはふと言ひ損せしなり。誰かおん身を他人扱にすべき。我著述といふべきもの出来たらば。最初に見すべきは。おん身なり。されど此疊紙の中なるは。見るに足らぬものなり。おん身も知りたる某の侯爵夫人が。わざわざ維也納まで手紙を寄せての頼なれば。辭まむやうな

責塞ぎに作りしものなり。所謂姫の「ペンレット」。眞面目なる沙汰にはあらず。いかに。我心は分りつらむ機嫌をなほして。その鈴索を引いて呉れよ。早や朝食喰ふべき時なり。おん身が此地に留まりたる眞の理由は喰ひながら聞くべし。譜を作らむためのみとは思はれぬば。」

食間グザはおのれが秘事をステルニイに告げしに。ステルニイ驚きたる面持して。「さてはかゝる事ありしか。おん身がためには。それより癡なるしぐさあらざるべし。若し尙且の戀のあまり久く結ばれたるならば我力には救出さむとおもひしが。結婚の約束したりと聞きては力及ばず。意外なる事かな。おん身が年にて妻を娶り。一家のあるじとならむは。これ身の破滅なり。これ自ら墓穴を掘るに同じ。かく言へばとて。おん身が軀を埋むる墓穴とな思ひぞ。埋もるゝはおん身が藝ならむ。おん身が軀はよの常の交をなして。淺しき徳義のために縛せられ。これがために榮ゆるなるべし。おん身は「オ、ルデルメン」のやうに肥ゆべし洗禮は頼に行はるべし。よぢれ上りたる袴を穿きて。樂譜の冊子を小脇に挿み。街より街へと走りめぐりて人に音楽を教へ。芝居に出で、「井オリン」ひきの首

座を占めむとおもふより外には。望なき身となるべし。若しその真中に立ちて調整ふる杖を揮はむとおもはば。是れ望の絶頂ならむ。馬鹿らしさよ。あん身が脊には旅仲間勸進元の杖をこそ受くべきなれ。安樂なる家中の椅子の軟き撥條入りの革に。まだうら若き才子の頭を据べきことかは。矧てや汝が頭を据えむとする張革の裏には。羽毛多からむとおもはれず。(姻家は貧しかるべし)然しそはあん身が問はざるどころならむ。藝に倦みて憩はむとするに。善き遁辭だにあらば。あん身はそれにて安堵するならむ。善き遁辭だに馬鈴薯盛りたる囊も。汝がためには恰好の臥床なるべし。

「グザ聞きもあへず。あん身が言は無宗旨の論に似たり。あん身は愛情の上の無神論者なり。」此答を聞きても。グザが誇張の癖まだ止まぬを知るべし。又語を繼ぎてあれども。明後日婚禮を挙げむとはいはず。位地定まりての後ならでは。夫婦にはならざる積なり。「責めてもの事なり。敵手は誰ぞ。教子の一人なるべし。胖大りたる市人の娘にて。「ブロンド」なる少女ならずや。」

「さてはガルチェリが産みし子ならむ。それを御身は妻にせむとおもへるにや。妻に。」グザ小聲になりて。「その愛らしさをあん身は想得ざるなるべし。」ステルニイは。ガルチェリが産みし子の美しく愛らしかるべきを。争でか想得ざらむ。」といひて。目に夢みるごとく。戀ふるごとき色をあらはし。さて言葉を續ぎて。「されどそれを妻にせむとおもふこそ訝しけれ。あん身はガルチェリが性を知らぬなるべし。」グザは唇を噛みて。「我養父はガルチェリを得てみづから幸なりとおもひき。」「いかにも幸なりとは思ひしならむ。ガルチェリがために狂せしは。彼のみにあらざりけり。彼はガルチェリが鞆を磨きても。みづから幸なりとをもひしならむ。テリレオが夫婦の間の事をば。己れも善く知りたり。今は昔語になりたれど。藝人の仲間には猶これを傳ふるものあり。唯人の名をば早や錯りたり。われはテリレオといふ名を忘れざりき。彼はあん身が親類なれば。又彼れはわれに初戀せさせし女の夫なれば。」

グザ驚きたるさまにて。言葉忙しく。「ガルチェリがお

ん身の初戀の女なりどか。」
 ステルニイは掌にて額を按りて。苦々しく笑ひぬ。

「さなり。わがガルチエリに逢ひしは「ダダウル」の座敷にての事なりき。我齡はまだ十八にならぬ程にて。容貌は女子の如くなりき。我戀はさこそをかしかりけめ。ガルチエリは只我を嘲笑ひしのみ。我戀は片思ひにて。遂に協ふ期なかりき。それより早や二十年を経たれど。ガルチエリといふ名我耳に入るときは。蒸熱き氣わが脈絡の中をめぐる如き心地す。さても彼の美しかりしことよ。其姿。其笑顏。其髮容。彼が髮は暗色なりしが。顛顛。項の邊に赤き光ありき。その光あ

るところは黄金の粉をふり掛けたる如くなりき。そが上はその立居振舞の大やうなりしこと。」
 ステルニイは忽ち語路を断ちて。空を見詰めたり。ガルチエリといふ記念は。此人の胸の瘡痕なり。

「ガザは友人の面色變はりたるを見て。あのれも氣色安かならずなりぬ。」
 「ガザ」かくまで類稀なる美人のいかなれば我養父の妻にはなりけむ。」

ステルニイ。「いかなれば。いかなれば。ガルチエリは聲を潰され。戀人を失ひ。病身になりぬ。其齡は三十

八なりき。デリレオは産ある家の子にて。嘗て慈善事業のため失ひし金は少からぬど。猶残りたるどころ妻を養ふには餘ありき。デリレオは妻におもひの儘の奢をせさせしに。妻は娘一人を産みて半年ばかりの後由緒あやしき波蘭人と墮落しつ。おん身が娶らむといふ少女は。そのとき跡に遺し、娘なるべし。程經て後デリレオはどある屋根裏すまひにて。病みおどろへたる妻に邂逅ひ。儼しくもまた我家につれ歸りて。その終を見届けつ。おもへば憫むべき男なりけり。ガルチエリを娶りしは。固より親戚の言葉に負き。朋友の諫を用ゐでの事なりき。今は財産もなくなりたれば。さてこそラエスタイン街には遷りしなれ。デリレオが運命は果敢なかりき。されど一年半ばかりの間。ガルチエリが傍に居りしは。せめてもの事なるべし。」
 言畢りてステルニイは暫し空を見詰めて物案じするさまなり。

「ガザは進寄りて軽く其臂を按へ。『おん身が斯くまで牢記して忘れたまはねガルチエリが面影を傳へて。その罪障を傳へざる少女なれば。わがこれを娶らむとあもふも宜ならずや。』」
 ステルニイは少し苦味を帯びたる笑を漏しつ。少女が

年はいくつぞ。十六か十七か。」

「グザ領きて。先づその位なり。」

「ステルニイは。その位にて性質の知られむ様やある。」

「とつぶやき。指にて卓を敲きて。輓歌の節をなした。」

「グザは面をあかくせしが。少焉ありて。『あれは深」

くおん身を愛すれども。今のやうなる語氣にて物を言

はるゝときは。怎にも堪へがたければ。先づ兎も角も

我結髪に妻に逢ひて。さてわが善く擇びしか。見誤り

しかの判断を聞かせよ。ラアエスタインの街をおそろ

しと思はずば。近きに我養父の家に招きて茶一つ薦む

べし。」

「ステルニイ。いつにても善し。明日にても。明後日に

ても。おん身が家の人は早起ならむ。朝疾く出掛に寄

るべし。」

「數分時の後。グザ暇乞して歸るを。ステルニイ戸の外

まで送りて。梯の欄越に。『さらば明後日の朝八時頃に

往くべし。おん身が結髪の妻こそ見たけれ。」

第十三回

「ラアエスタイン街の十番には。けふしもさも事ありげに見えたり。蒸したての菓子のは。梯にも廊にもみ

ち／＼たり。アンチツトはちもての色絶間なく變りて。

道具のおき處。幾度となく草むるもかしここの損じ

たるを掩はむどてなるべし。手を收めて後。美しき目

にて縁いろの壁を見て。『彼君はこのあばら家をいか

にか見玉ふらむ。』とおそる／＼いふを。グザほ／＼笑み

ながら慰めて。額に接吻し。軽く頬のわたりを敲き。

「心をな苦めそ。吾友は汝を見むどてこそ來れ。この

家を見むどてにはあらず。」

娘にも増して心を痛むるは。父のテリレチなり。晝は

みたる行李より舊き禮服を掘出し。その龍腦の鼻を帶

びて。襟の太きところは公民王の時の趣味を見せたる

をも厭はず。これを身に着けて彼室より此室へどさま

よひありき。『ハンカチーフ』引出して壁に掛けたる畫

の欄を拂ひ。半ば暗うなりたる鏡の前に立ちて。愧か

しげに斜視し。震ふ指尖にて大なる「アトラス」の襟飾

を整へなす。この襟飾は縫とりいと美しき「マチス

ト」の汗衫の黄ばみたると共に。ルイ。フィリップが

世に時めきしものと見えたり。

「グザは一家の騒しきさまを見て。戯に嘲りたれど。心の中には大事の前なれば。さもあるべきことと思へるなるべし。」

八時の時計響くときは。皆胸に波打たせ。八時を過ぐること五分になりしときは。テリレオ「彼君は來ぬやらむ。」とつぶやき。十五分過ぎしときは。アンチット訝かしげに結髪の夫を見やりて。「彼君は體におん身に約し玉ひしか。」と問ひぬ。八時三十分になりしとき。外の廊のわたりに物音するを聞きて。失望に慣れたるテリレオは「斷の使にはあらずや」といひき。

「テリレオ君の住居はこゝなりや。」と梯の上にてうら問ふ聲はいとみやびたり。老いたる新聞記者テリレオは左手の拵と人さしゆびもて。あのが頬を擦り。強ひて鎮まりたるさまを見せむとしたり。アンチットは身を匿しつ。

二三秒にして扉開き。あやしき緑いろの座敷に入來りしは。氣高き明髪の男なり。着たる裘を戸の外にて脱がざりしため。しばしは度を失ひたるやうなりしが。そは真に一瞬間の事にて。グザ馳寄りてこれを脱がするや否や。グザが引合せの禮をなさむとするを遮りて。テリレオが手を優しく握り。われらは舊識なる者ぞといふ。テリレオは軽くこれを受けば。無禮なるべしとおもひて。手を動かしてとめむとせしに。ステルニイ重ねて。「君はその昔ダグウル伯爵夫人の許にておち

合ひし情痴の少年を。はや忘れやし玉ひけむ。こなたにては。當時君がわれを憐み。われに友情を寄せたまひしことを忘れ侍らず。君が友情はまことに我を慰めき。當時は君と我と殆く同病相憐むやうなるさまなりしが。後には君のみ福を稟けたまひき。」かくいひつゝステルニイは壁に掛けたるガルチエリが像を仰見たり。そのいち早き目には此油畫を見出すこと何の苦もなかりしなるべし。

テリレオはこのやさしき言葉を聞きて。目に涙を浮べ。親しく客の手を握りたり。

さてといひかけて。ステルニイは面白げにグザが顔を見たり。君がわれに約し玉ひしは。この再會のみにあらず。この外に猶生面の人に引合せ玉ふべき筈なりしが。

グザは後を見かへりて。「あろかなる子ならずや。耻かして隠れたりと覺ゆ。」言畢りて次の間に出でしが。かなたより優しく促す聲聞えたり。「いざ。子供らしき振舞して。人に笑はれ玉ふな。」グザが腕に依りて。面には羞を帯び。唇には熱を見せて出でたる少女は。氷の如く冷なる指尖をステルニイが掌の内におきたり。

心迷ひたる如くステルニイはしばしば少女を見詰めて居たりしが。みづから抑へて軽く少女が手を執り。唇にあし當てし。かく慣々しきを怪み玉ふな。君が結髪の方の爲には年久しき友にて。又君が母御のためには崇拜者の一人なりき。さてデリレオに向ひて。餘りに面影の似玉ひたれば。ほどくちあそろしき心地しつ。おもふに母御の再来にやあはすらむ。」

レアエスタイン街にてステルニイが優しさは實に類なかるべし。されどこの優しさは。彼がためには何の苦をもなさざりしなり。あのれが永く居らむことをおそるゝ處にも。しばしば遊びて興ありどもおもふは。富貴の人の癖なり。ステルニイがこの家にての心は。斯の如くなりしのみ。

デリレオに向ひては。彼を敬してあのれを謙け。ゲザに對しては。半ば朋友間の調子を取り。半ば父の子を遇する如き氣色を見せて。これに應れたり。さて二碗の茶を喫みて。菓子の旨味を讚め。おのが飢に誇りたる趣味には善く憐ひたりけむと思はるゝこといもを語り。いでしぬ。

ガルチエリが娘は鼻白みて仰見むどもせず。さてありながら。少女は客の姿をも。その振舞をも洩らさず見たり。客はレアエスタイン街より外へ廻らむ心構に。集會に起く時の服を着けたるが。この服はいとよく似合ひたり。少女がためには。客の白き襟飾。その「サレエ。アン。キヨオル。」その式の如くなる髪の毛など。皆尊くのみ見ゆるなるべし。

ステルニイは。優しく言葉を掛けしが。少女は唯と葉すくなに應ずるのみ。

會話のあまりにはえぬに。客はデリレオに向ひて。「娘御は音樂のちんたしなみあるべし。怎に。」

「唱歌少し學ばせしこと待り。」

「み蹠は定めて。」ステルニイはガルチエリに似たるべしといはむとせしが語を卑へざりき。

ゲザ。傍より。「何なりども少し歌うて聞かせずや。強ひてはいはじ。されど賓人のために。」

「そはいかに嬉しからむ。」とステルニイ引取りていひき。少女は答をもなさで。夢の中にさまよひありく人の如き姿にて立上り。「スピチット」(樂器)の側にゆき。譜を倚講架の上に載せたり。譜はマルチニの作にて名高き「戀の樂」と題したるものなりき。ステル

ニイいち早く弾かたにならむといひしに。少女は羞を
 含みて頷きつ。少焉ありてこの貧しげなる襟いろの部
 屋に。不朽の戀の歌の中に、最不朽なる言葉。柔く
 哀なる聲に擔はれて漂ひたり。全歐羅巴の唱歌女生徒
 の力の猶未だ減すこと能はざるは此曲なるべし。

Plaisir d'amour ne dure qu'un instant

Chagrin d'amour dure toute la vie—

(戀の樂てふものは。唯ひと時のものなれど。戀の苦
 艱は絶えざらむ。人の命のつくるまで。)

少女は式の如く兩手を軽く疊ねたりしが。頭をば式に
 かははらで右の肩に傾けたるさま。その重さに堪へざ
 る如く見えたり。その聲は徹にちる／＼胸より洩出
 たり。聲の胸のうちにて震ふさまは。抑へたる感歎
 の如くなり。
 少女が側に歩寄りたるゲザは。容に向ひて。「おん身を
 恐れてなるべし。常に臆細き少女にあらねど。」とつ
 ぶやき。「ボオウル。プチイ。キヤット」(あはれなる
 小猫といふことなり)といひて。アンチットが髪を撫
 でつ。

この罪なき顔も。見るに忍びざる如くステルニイは眉
 を蹙めて。デリレオの方に向ひ。變らぬ聲なり。少し

も變らぬ聲なり。善くも似たることよ。さて少女に。
 「いま一つ歌うて聞かせたまはずや。吾願なれば。」
 ゲザは種疊ねたる譜の片より手づから寫したる一枚を
 引出し。これを見事に載せ。心を指かて歌へ。とアン
 チットに説き勧め。自ら「スピチット」の上なりし「井
 オリン」を取り。「此曲は聲と「井オリン」どに作りたる
 なり。ステルニイ「ア」の聲を。」

ステルニイは頼まれて「ア」の聲を弾出しつ。

ゲザが見事に載せしは。あのが作りし「ダンテが地獄」
 の曲の一段にて。「チツソン。マツオル。ドロオレ」
 (Nessun maggior dolore)と題したるものなりき。こ
 の段は世に珍らしき結構にて。「井オリン」の絲聲舊歡
 のかたみを喚起して。媚ぶるが如き調をなすとき。肉
 聲は低く柔なる夢寐中の調に始まりて。臆を断つ苦
 惱の調に終るやうに作りたり。こはゲザが著作中にて
 最得意の一段なれば。少女が歌ひ畢りしとき。ゲザ
 が頬は燃ゆる如くなりき。爾時ステルニイは覺えず手
 を木板の上より滑落させて。ゲザが面を眩度見詰め。

「こはおん身が作か。」
 ゲザは頷きぬ。
 「さらばおん身がために賀せむ。疑もなき傑作なり。」

言畢りてステルニイはその少年の友を擁きたり。

十一時に垂どせし頃。ステルニイは用事ありとて辭し去りぬ。それ迄にはグザに自作の曲の種々の節を彈かせ。いづれをも面白しと稱へき。

グザは客を送りてラアエスタイン街を出で。賑はしき處まで隨行きしが。ステルニイは何事かを思居たりけむ。言葉すくなにのみもてなしたり。グザ聲高く。「おん身が見たるところはいかに。」といひしに。ステルニイわれに返りし如く。「結果好きこと必定なり。」と答へき。

グザ笑ひて。「結果好しとは。我夫婦の間の結果にや。」この反問は意外に出でたりと覺しく。ステルニイは慌てたるさまにて。「なに。その事か。ガルチェリの後。はじめてかく美しき女を見たり。それさへあるに。聲のめでたさ。マリブランはものかは。」

「さて。」とグザが問はむとせしどき。二人は恰もブラス。ロアヤルに來ぬ。ステルニイは急に友を顧みて。「かしこに車あり。最早無かるべきかと思ひて氣遣ひたりしに。さらば。明日は『地獄』を皆持て來よ。」言畢りてステルニイは車を招き寄せ。これに飛乗りて去りぬ。

ラアエスタイン街にては此夕物語いと繁かりき。デリレオは頬紅きこと三鞭酒飲みし如くにて。常に増して能辯なり。グザは少女に向ひて。ステルニイが褒めし節々。おちなく語傳ふれど。少女は眼足らで喚起されし穉兒の如く。何事をもうるさがりたり。少女は唱歌のいつになく拙かりしを悔て。返らぬことをつぶやき。平生父の言葉多きを喜べるに似ず。けふはすこしも耳を借さず。果は眉を蹙めて。父上の部屋の中を彼方此方と歩み玉ふを見れば。目眩きて堪へがたしといへり。デリレオ聞いて。興を損し。椅子に倚りしに。

少女は今更に氣の毒がり。許し玉へとかこちて。忽泣出でぬ。グザは少女を膝の上に抱上げて。代りて涙を拭ひ。かにかくと言慰め。その頬を撫でつゝ父に向ひ。この子はあまり引籠りてのみ世を送ればこそ。些細の事にもかく劇しく感動するならぬ。この子の心慰む術もがな。」

父は苦々しきおも持して應へざりき。ステルニイは夜の三時すぎに客舎の梯を上りぬ。けふも衆人のあのれを喝采せしことは常の如くなりしが。何故か心樂まず。

「路なる童も今は吾名を知り。掃除人足さへ振返りて。あれこそ名人のステルニイなれと指せり。されどわれ死なば。能く何物をか遺さむ。『ピヤノ』の曲譜一つ二つはあれど。それは後人の笑を招くのみなるべければ。」かく獨言ちて思に沈める時。ゲザが歌は心の中に響きわたれり。寒からぬに膚粟立ちぬ。忽又美しきアンチットが事をおもひ出で、額を撫でつ。家の中なる生活あまりに静ならば。藝術の行末覺束なからむといひしが。彼がためにはその憂はなかりけり。彼少女は猶睡れり。されど母よりは熱情を傳へ。父よりは神經質を傳へたりと覺ゆ。その姿のめでたさ。」

第十四回

この頃ステルニイは心さわがしくなりて。名聞を好むことむかしに倍する如くなりき。『ピヤノ』弾く手も變りたり。強ひて非凡ならむと欲して。あやしき癖に陥り。指に任せて木板を敲きちらすを。聴衆は夢中にて譽め。批評家はいみじき發達なりと稱へけれどステルニイが胸はなかくに安からざりき。

ラアユスタイン街溝は凝りて流れず。基督の像のもろ手よりは氷柱長く垂れ。みどり色の座敷の窓硝子に

は。この頃の凍に時ならぬ花咲き出でぬ。されどアンチットは唇いつも燃えて。掌いつも熱かりき。あるきざま足を曳く如く見えて。立振舞に夢心地ならずやと疑はるゝところあり。目は遠きところをのみ見たる如し。今迄は結髪の夫に對して。子供らしき強情をありの儘に見せ。絶えて氣を兼ねることなかりしに。近ごろはいづくよりか他人行儀出で。ゲザが言葉をば一も二もなく守り。時ありては又故もなく怒を帯びて。そのいひつけに負くことあり。さてかくつれなくもてなすこと久うなりて後。俄にもひ立ちしやうに。また心を籠めてゲザに親み。涙を流して日頃の無禮を詫びなぞす。ゲザはこの定なき振舞を見れどもあながち心にかげず。をりく面白からずおもはるゝ事あるをも。病ある子供の所爲のやうにたゞ知らず顔に看過しぬ。とあるゆゑ暮。ゲザと父とは例の文學美術の話に深入して。あたりの事を打忘れたるをりしも。いま迄のこと葉少く。思ふことありげに。馬尾装滿たる剛き長椅子の片隅に倚り居たりしアンチットおきなほりて小き頭を擡げ。なにやら聞くやうなりき。この時早く扉を叩く人あり。ゲザもテリレオもまだ聞きつけぬ間に。アンチット忙しく入り玉と呼びぬ。

扉は開きぬ。「邪魔にはおぼさずや」と優しきこわ音にて會釋し。此間に入るはアルフォンソ。ド。ステルニイなり。

数日の後、グザ外稽古を畢りて歸りしが。「こはいぶかし。アンチット。こゝには龍涎の香残り。ステルニイは來ざりしか。」と問ひぬ。

「次の合奏の切符をもて來ぬ。」と答へし少女は面を舉げざりき。

障なくば明日來よ。語るべきことあり。ステルニイ。この口上がきをばグザある夕ちのが部屋にて見出しつ翌朝正直に「オテル。ド。フランドル」にゆきしに。

ステルニイ出で迎へて。「金おほく贏くる心はなきか。」グザ。問はるゝ逸もなし。我が窮したるをば。御身も知らずや。例の曲を用ゐるべき機會ありとの事か。

ステルニイ。「まだその口をば見出さねど。外に善きことあり。それがしが昨日得し電報を見れば井ナンスキイが臂を折りたるために。マリンスキイは食はせて一萬フランの月給にて。上等の「井オリン」ひきを雇

はむといふ。おん身は雇はるゝ心なきや。」グザは頭を低れて小ぢるになり。「幾月の旅ならむか。」と問ひかへしつ。

ステルニイほゝ笑みて。「六月。おそくとも八月をば越さじ。返事をば明日聞かむ。よもや船に酔ふとぞおそるゝ男にはあらざるべし。」

グザ。「その事にはあらず。されど一應アンチットにも相談すべし。六月か八月かといへば。短き間にもあらず。道も随分遠し。アンチットはおそらくは承知せざるべし。然しおん身が心入の程はありがたし。」

かく答ふるところへ下部來て。貴き客の刺を通じければ。グザは避けて歸りぬ。

マリンスキイが雇入の事を聞きしときのアンチットが喜は。グザがためには意表に出でにき。アンチットは。いさましく。「おん身がかゝる名家になりしをば。今までも知らざりき。」といひぬ。

「雇はれて行くべきか。」と問ふグザが聲は震ひ。その眼には涙みちたり。アンチットは暫し驚き呆れたるさまにてグザが面を打守りしがおん身はことわらむどおもひ玉ひしか。富める人になりて。亞米加利より歸らむ時をおもひ玉はずや。」とつぶやきぬ。

グザは猶一たびといき吐きしか。頭を屈めてアシチットが額に接吻し。「まことにおん身が言ふ如し。わが猶豫ひしは臆病なりき。」

グザはマリンスキイが影に入りぬ。

数日の後ラフェスタイン街にめぐらし立派なる會食ありき。坐につらなりたるグザは日ごろ嗜むものをも皆その儘におきて食はず。アリレオは勉めて雑話をなし。哀しげなる一座の光景を掩ひ隠さむとして。胡椒を果汁の上にふりかけ。最後に震ふ手もて杯を舉げ。グザが歸郷の早からむことを祈るといひぬ。

今までは興ありげにグザが出發の日を數へレアンチツトは。この時に至りて刻々別離の苦を覺ゆる如く。面色變り。饑には手に綱れず。また一言をも出さずなりぬ。その目の中には限なき苦痛見えたり。グザおはれがりて引き寄せ。血色なくなりたる頬を撫でしに。少女は咽び泣きてグザが體にからみ付き。繰返して。

「ひとり残して往き玉ふな。」といひぬ。
この理なき言葉にはグザ答へず。唯優しくもてなし。て賺し慰め。さて父に向ひて。「つとめて此子を慰め玉へ。折々は芝居へも伴ひゆき。時候好くならば。すぐ田舎へ引越し。興あるべき書を書き讀み聞かせ玉へ。我等二人に面白きやうなる書は悪し。此子に面白かるべきものあるべし。」
アンチツトは涙の中より父に向ひて。「この人より善き

人。世にあらべきか。」どかついふ。

この時婢入り來りて。「車はロアヤルの廣こうちに待ちて居り。グザ様の荷物を取らむとて。會社の役人來ぬ。」といふ。グザは仰いで時計を見。「最早時刻なり。泣き歇め玉へ。」とアンチツトをすかしつ。

アンチツトは猶繰返して。「ひとり残してゆき玉ふな。」と泣きつゝいふ。

グザは少女の軟き腕をまひて引きほどき。言葉もなくテリレオが手を握り。走りて出でぬ。街に降り立ちしどき。樓の上に窓を推しひらく音して。アンチツトが「かへり玉へ」と呼ぶこゑす。グザは仰ぎ見て「さらば」といひしのみ。足を速めてロアヤルの廣こうちに向ひぬ。

瀟車の出でむとするどき。「アランド」にて背高か。毛革の外套を被たる人。車の踏板の邊に駆け付たり。

「ステルニイ」かと呼びしグザが聲の中には感激の情みち／＼たりき。

「わが來べきことをば知りつらむ。某の許に居りしが。いま一度あひて開運を祝せむとおもひて。人目をぬすんで來ぬ。」
車掌室の扉を開けばグザは入りぬ。

ステルニイは再びよろこびをのべたり。
「グザは車の窓より半身を出して。」「あん身が親切はいつまでも忘れざるべし。嫌ならざれば明日あれが様子を見て呉れよ。」
「明日は必ずあとづれて。あん身が機嫌好く立ちしとを話さむ。」
車の動きはじむるとき。ステルニイは猶笑を含みてしまぬきたり。

別るゝどきのステルニイが顔はやさしく。親切氣なる笑がほなりき。グザが念頭に残りし友の顔もまたやさしく。親切氣なる笑顔なりき。

第十五回

南米諸國にブラヅリヤかけて黃熱盛に行はれければ。マリンスキイが一群は預め定めし時を待たで歸郷の途に就くこととなりぬ。
期に先だちて雇を解かれしために少し削られたる給金を受取り。誇張を極めたる批評ある新聞一束とアンテツトがために買ひし紐育チフアニイの飾二三種とを持ちて。グザは彼一群の人々を載せて歸るべき「アルカヂヤ」號の漁船に乗り遷りぬ。

アンテツトをおもふグザが心はいと切なりき。プリニセルを立ちし時。少女が氣色あまりあしかりければ。別れたりし間のかなたの悲おもひ遣らるゝまゝに。復相見む折の喜もまた一入ならむとおもひぬ。グザは不意にかへりて少女を喜ばせばやとおもひぬ。その時の少女が目はいかならむ。船中に眠りても。忽ち歡の聲をあげ。アンテツトと呼びて醒むること屬なりき。

グザは歸思矢の如き譯をば一行の人皆知りたり。グザはアンテツトが事を人々に語りぬ。アンテツトとステルニイとが事を。人々は皆グザを可愛がりて。アンテツトが様をおもひ遣り。無理ならぬグザが歸思を感むるうちにも。ステルニイを譽むるをば怪みけるが。ある低音うたひの翁は氣遣ひて。「あれはおそろしき人なれば。構へて心許し給ふな。」と諷めつ。

グザは其諷を悪く取りて怒の色をあらはし。低音うたひをきびしく責めしが。翁は唯ほゝゑみて相手にせざりき。
影の中にツユセツピナといふ娘ありき。赤き髪ゆたかに生ひて解きたるときは塵に達せり。色青く。黒き目圓く。鼻低く。口大なれば。その顔のづから髑髏めきたり。されどこの娘にも女らしきところありて。微

笑むときは愛敬あり。その絶間なくほゝゑむさまは。何事ありても喜ぶことなき人に似たり。ゲザはこの少女にアンテットが事を話すこと屢なりき。少女はいつも耳を傾けて聴き。時としては泣きぬ。少女はこの群の最高音うたひなり。中音うたひの男を夫にしたる次高音うたひは品行自慢にて妬深ければ。シユセツピナとは中善からず。

巴里にて夥を解かむとせしとき。シユセツピナはゲザが頸を抱いて親嘴しつ。シユセツピナは小き黄金の十字架をわたし。小聲にて「こはわが始めて尊き晩餐(宗門の式)に列りし時。母上に貰ひし物なれば。おん身が結髪を行末を祝きておくりまゐらす。我持物の中にて御身が結髪の人におくらむ程のもの此外にはあらじ。」といひぬ。藝人のうちには婚魘のをりよろこびに往くべしと契るもありき。

ゲザは人々にわかれて巴里を出でぬ。頃しも六月の末の半にて聖屍祭に當れりき。停車場ほどに白衣きたる娘幾人かありて。折々は加特力教の法師の行列。遠きどころに見え。その歌は世になき人の聲の如く。旅人の耳に震ひ響きぬ。

夕暮にブリユセルに着きて車を雇ひ。モンタグ。ド。ラ。クウル街の角へど命ずるにこの取者の癖どて。さも而倒らしく。さもうるさげに高低不定の道をあゆませたり。北極の夏の常なる蒸す如き暑はこの市を掩へり。空氣の人を壓し。人の息を塞さがむとするは花卉をそだつる室の裡に入りたる如くまた餘りに爐火を熾にしたる部屋に居る如し。地上の物はつゆばかりも動かずして。唯本街の並樹の嶺にすこしの戦を見る。きのうの雨の餘波なる路上の水濺は蒸氣を立たせたり。大空にはまたの雨催に雲やうやく娶れり。いづかに向ひても。地平線のあたりには微なる雷の音を聞く。重く又哀に剪鬪氣の理にみち／＼たるは。けふの祭の紀念なる護摩の烟。蠟燭のゆえん。濁るゝ花のにはひなり。家々の壁には猶其物車を倚せかけたるあり。卓のめぐりの木葉は萎び。花は枯れたり。ゆたかなる薔薇。やさしき向日葵。あとなき鎮痛草の花。皆敷石の上に落ちて。人に踏まれ泥にまみれたり。

ゲザがロアイヤルの廣こうちにて車より下るゝとき。五色の緞とりたる帽を戴き。紅の「シヤウル」を引掛けたる女ありて道の上なる花を拾はむとあわたしく身を屈めつ。彼は法師の行列に逢ひては躲れ避くる女の

一人なり。その家はラアエスタイン街にあれば。ゲザにおもてを知られたりき。ゲザはあはれに思ひて手を衣のかくしに入れ。二十「フラン」の貨幣一つ探り出して取らせしに。女は首を擧げて。鏡く悪人の面を見。一禮して俄に紅粉を粧うたる顔をそむけつ。

ゲザはラアエスタイン街に來ぬ。溝よりは穢らはしき瓦斯立ち昇れり。蚊は雲の如く群りて四邊を聞うしたり。基督の像の姿はいつよりも悲しげなり。行き違ふ人は多く會釋せり。「ヒュニテ」といふものめきたる瘦狗どもは尾を掉りて近づき。中には冷なる鼻をゲザが手にをし付くるあり。アリレオが家の平間にて。青物あきなふ女に。「誰もうちには居らぬか」と問へば主人の君も嬢様も不在なり」といふ。便ながりて。散歩に出でしにや。」と問へば。「否。然にはあらざるべし。嬢様は寺にまゐられぬと覺ゆれば。最早歸り玉はむ。寺は鎖さるべき時なれば。若し「サント。ガヂユウル」の寺に往きたまはば。出逢ひ玉ふべし。」

大小さまの街。車輻の如く集りたる凸凹ある辻に立てるは「サント。ガヂユウル」の寺なり。造作は軽くして看透すべく。勢はあたりを拂ひて。エグモント。ホオンの魂のさまよふ市に聳ゆるはこの寺の塔なり。寺の壁の黒くなれるは神の名をかたりて罪惡をかさぬし人々のために喪に居るかと疑はれ。寺の冷なる堂よりは墓穴に似たる陰森の氣出で、人の面を撲てり。ゲザは進み入りぬ堂の内はほの暗く。襦いろにして蝕みたる榻どしらけたる藁の圓座どのありたりは深き影に掩はれてよくも見えず。こゝに坐したる人数は最早いと少し。アンチツトはいづくと尋ねれど。たやすくは見出されざりき。

目に觸れたるは老女二三人の磕頭きたる。青き前垂したる子供の足をつまだてて銅盤の水を掬はむとしたる。二人の乞兒の門の傍に立ちたるのみ。式は早や果て。高座には僧あらずなりき。見るがうちに子供は外面に歩み出で。老女等もあらずなりぬ。

ゲザは又目を四方に放ちて覓めしが甲斐なかりき。やうやく高座に近きて祈のこ葉一つ二つ陳べむとす。あやしげなる汎神教を奉ずるアリレオには育てられぬれど。猶加特力の祭に心引かるゝは。稱き折の母の躰

第十六回

残りたるなるべし。

その時忽ち大息つく人ありと覺えて。影暗き方を見れば。わが足許に近く躊躇りたるものあり。喜胸に溢れて。却りて胸苦うなりぬ。「アンチットにはあらずや。

アンチット。」と繰返してさゝやぎしに。うづくまりたる人は影の中より立ち現れぬ。アンチットはしばしグザが面を打守りたりしが。一聲細く叫びて身をふるはせ。傍なる柱に倚りてわづかに自ら支へつ。

グザは餘りの迎へさまに驚き呆れ。怒を帯びたる聲にて。「アンチット。いかにかせし。我面を見ておそるゝは何事ぞ。」

少女は頭を掉りぬ。その顔色の灰の如く見えたるは。薄闇き寺堂の内なればにや。「かく遠に來り玉はむどは。おもひかけざりければ。そが上に病身なれば。」

「病めりどか。さては無理ならざりき。わが俄に呼び掛けしを怪きものゝやうにや思ひけむ。先觸なしに歸りて喜ばせむとおもひしは。誠にあろかななる心なりき。かく贖罪して。身の寺内にあるをも打忘れ。引寄せむとするを振り拂ひて。「こゝにては」と四邊を見廻はしぬ。さてアンチットはグザが肘に身を持たせて寺を出でぬ。

空氣は濕りて鬱陶しげなり。雲は低く垂れたり。適ま燕一羽力なげに辻を横ざりて飛び去りぬ。寺の内の薄闇きに比ぶれば外面は猶明かりき。

グザは慕はしげに目を少女が面に注ぎつ。色は死人の如く青く。頬は昔より狭く。唇は昔より赤く。目は昔より大なり。昔の美しさは重味ありて。全くその形にありしに。いまは口鼻のめぐりに細なる線あらはれ。目のあたりは物おもはしげなる影生じて。その風情人を惱さむとす。

「あん身がかくまで美しきをば早や忘れたりき。」といふグザが聲は強き情に壓されて僅に洩れ出たり。アンチットは笑みつゝ仰ぎ視しが。その笑は狂ほしげに怪しかりき。笑ふとき目のまはりの影の濃くなりしために。顔の美しさはいや増したり。

この時グザはアンチットが顔の何物にか酷く宵たるをおもひ出ししが。その物をばおもひ得ざりき。色褪めて凋れ掛り。よわくしき頭を街の敷石に持たせたりし薔薇の花にはあらじ。然らば何物なりけむか。然なり。いまこそ想得たれ。アンチットが今の面の少しシ

ユセツピナに似たるを。初に軽くグザが肘に掛けたりし手は。今親しげに腕に

からみ付きたり。グザがラアエスタイン街に曲らむとせしとき。少女は留めて。「すこし迂路なれど公園を歩みて歸らばや。おん身が好みて往き玉ひしどころくを見て歸らむはいかに。」

「よくぞ心づきし。」と答ふる聲に喜はみち渡れり。濁るゝ花の香は猶空氣の中に漲りて。其間には新しき

「アカチャ」の花のほひ雜れり。

二人は公園に入りぬ。園の内には人氣なかりき。黒き木の頂を折々わたる風は震ひ戦ぐ如くなり。グザ。「おん身はまことに病身なりや。」

「然なり。」と答へしアンテットが聲は低く濁りて。やうやく抑へたる苦痛の叫の如くなりき。暫くしてアンテットは劇しく。「いかなれば我ひとり殘して往きたまひし。」

「我を出し遣り玉ひしは君ならずや。」とグザ蹶のやうに答へぬ。

「げにそは眞なり。」と少女は輕くいひぬ。

二人はしばし言葉なかりき。天は次第に暗くなりぬ。少女は遠に立ち留りて。「秋の頃いつも水潦ありしはこゝなり。おん身はその時我を抱いて渡り玉ひしが。猶そを忘れ玉ばずや。」

グザは笑みつゝ頷きぬ。又二足三足ゆきしどころに大なる石盤ありて。夕日のしらけたる影は水の面に浮びたり。

アンテット。「こゝはおん身がニツツア(伊太利)の事を語り玉ひしどころなり。神使の入江の事を。」グザは又ほゝるみぬ。どかくして或る石像の下に出でぬ。アンテット。「こゝはおん身が我にボルヂケラの莊をおくらむどのたまひし處なり。猶覺えてやおはする。われ等二人が造りしは屋氣樓なりき。美しき屋氣樓なりき。」

木の頂の戦ぎは劇しくなりぬ。少女は身を仰らせ。面を擧げて。夢見る如くグザが顔を打守り。「誰も見ぬば親嘴して。」とさゝやきぬ。この親嘴は長く。燃ゆるやうなりき。アンテットは微晒みて。かすかに「今一度」といひしが其聲はなけば梢の戦に消されぬ。再び親嘴せし後。グザ。「浮世はいかにうれしく。めでたきものなるか。けふまでは知らざりき。」

咽ぶ如き聲は長く木々の上をわたりぬ。アンテットは我にかへりし如く。「夕立の來ぬ間に歸らばや。」といふ。其聲は忽ち鏡く聞えぬ。二人は踵を旋しつ。

第十七回

結髪いんげつの妻つとに。シユセツピナが十文字じゅうもんじの飾かざりを透あは與へしと
 き。ゲザはいひき。「これをおん身みが身みにつけさせむど
 にはあらねど。せめては大事たいじに藏かくめおき玉たまへ。こはシ
 ユセツピナがためには最も大切たいせつなるものなりしを譲ゆづり
 呉くれたるなれば。」

ゲザはこの時ときかの歌女うたひめのあはれげなる姿すがたにて。羞はづを含ふ
 みて。優やさしくもかの飾かざりをあくりしときの事ことをも物語ものごとり
 ぬ。アンテツトは家の闕あひらにてゲザに別わかるゝとき。かの
 飾かざりに接吻せつぶんしつ。さて。「父ちちは今宵こんや真夜中まよなならでは歸かへり玉たま
 はざるべし。さらば。」とさゝやく。ゲザは暫しばしアンテ
 ツトが顔かほを打守うちまもりたりしが。さてあるべきにあらねば。

明日あすこそまた相見あひまめとて別わかれぬ。
 ゲザは歸かへりて。かの十番じゅうばんの家いへに向むかひたる。昔むかしの小部屋こへや
 にあり。獨ひとりり坐ましてこよひの事ことを思おもひつゞたり。嬉うれし
 しくて。却かへりてまた物苦ものくるしきやうなる情なさけは豚みけといふ豚みけ
 を張つらしむ。アンテツトが斯ごとく人を迷まよはしむるやうに
 美うつくしく見みえしことは今日こんにちまであらざりき。又また斯ごとく心こころを
 攪まるやうに親したしく物言ものいひしことも今日こんにちまであらざり
 き。少女せうごが優やさしき微笑ほほえ。少女せうごが大たなる目めの照てりわたれ

りしなどおもひ出いせば。そのさま猶なほ我が胸むねのあたりを
 離はなれざる心地こころす。かの少女せうごと夫婦ふうふになりたらむ折しの樂たのしみ
 はいかなるべきか。まことに思おもひ遣やるにも餘あまりあるべ
 し。

されど少女せうごは病やめりといひき。これを思おもひ出いせば。寒さむ
 き風かぜ一陣いちぜん。暖ぬかなる夢ゆめの中にぞ吹ふき入りたる。おもふに
 少女せうごはまことに病やめるならむ。いたく病やめるならむ。
 その親おやしかりしは別わかれ臨まみての親おやにやありけむ。その
 美うつくしかりしは。こゝまで思おもひつゞくる程ほどに。おそろし
 き憂うれげを襲おそひ來きぬ。

折をりしもあれ。戸との外そとを吹ふくは毎つねに雷かみなりに伴ともなる。蒸むす
 如ごとき風かぜなりき。枯かれなむとする花はなの香かは。腐くさるゝ物の
 臭におに纏まとりて窓まどより入り來きれり。
 あまりに心こころに掛かりければ。ゲザはアンテツトが窓まどの方かた
 を見みやりぬ。窓まどは開ひらきたり。優やさしき頭あたまは窓まどの外そとに鎖くわさ
 し伸のべて。こなたを望のぞめり。青あおき色いろを帯おびびたる月つきの光ひかり
 は。彼方かなたなる古家ふるいへの壁かべに落おちて。少女せうごが優やさしき姿すがたの影かげ
 畫えを真黒まぐらに寫うつし出いたり。

畫えを真黒まぐらに寫うつし出いたり。
 人ひと氣き絶たえて。眠ねれる如ごとき街まちを隔へたて。ゲザは「アンテ
 ツト。アンテツト。」と呼よびぬ。
 少女せうごのほゝえめるは。かはたれ時ときの灰はいいろなる紗かを隔へた

て、見ゆ。少女は「安らげく臥させ玉へ。」と微笑にひ。小きもろ手を唇にあてゝ。細嘴の形をなし。さて意を鎮しつ。ラアヌスタイン街は鉛の如くちもくろしき沈黙に掩はれたり。ゲザは幸に酔ひたり。心の底にアンネットが微笑を包みて。彼は眠りぬ。

まだ朝の五時にもならぬ頃。前なる街はあやしく賑はしうなりぬ。ゲザは醒めたり。外の面には物に激せられたるやうなる聲。忙はしき寔音聞ゆ。火事を出し、家あるにや。さわがしさはいよく増りぬ。何事にかあらむ。ゲザはいそぎ衣を衣て梯を下りぬ。

空気がまだ濕りたり。朝日はまだ澤なきに。かすかなる紅の色雜りたり。屋根の上には雀の常にもまして驚しく啼けるあり。テリレオが家の前には人立したり。いかなる人にかと見れば。まだ夢のよくも醒めざるにや。指もて唾を擦りたる女の。髪はあどろなしたるあり。仕事にとて出で立ちたりと覺しき職人跡の男あり。いづれも塵埃の塵れし肉をねらふ鴉の群など。の如く。眼を光らせ。頭長くさし伸べて。近う寄りむとひしめいたり。中にて物言ふは野菜あきなふおうなり。その面には珍しきものを目のあたり見きといふ。慢心あざやかにあらはれたり。ゲザはその言葉をかた

へ聞せしが。はじめは何の事とも辨へざりき。されど暫しありて。やうやう事の情を曉りつ。おうなはいひき。「いま筈をくすりやへ遣りぬ。されど最早間にあはざりき。間にあはざりき。」

「テリレオの君が卒中にてもせしと言ふにや」とゲザ問ひしに。「なに。テリレオの君のいかで。」と人々いへるが中に。女ばらの顔打ち背けたるもありき。「死なれたるはアンネット嬢なり。ゲザは目くるめきぬ。「何故ありて。アンネットが。」

魂も身に添はで。ゲザは梯を上りぬ。あわたいしくアンネットが部屋を叩きつ。この部屋をばかねて熱く知りたり。こはゲザが穉かりし程。母と共に住みたりしどころなり。唯だそのさま今は昔にかはりて美しく飾りたり。老いたるテリレオは小き臥床の縁に腰掛けて。あまりの事に涙も出でざる目を見張りて。白き布に掩はれたるのを。打ち守りて居り。

「爺御。よとゲザ呼びぬ。老人は此聲におどろかされて跳ね起きたり。身うち悉く震はせ。手を額に加へたるが。あはれに黄ばみたる顔には肉の顔見えたり。「あはれと思へ」と呼びし聲はきれくになりて。吃

りて。儼に開ゆるのみ。「あはれと思へ。娘は悔たり。娘はみまかりぬ。」

「ゲザは布を引退けつ。白き床の上に臥したるアンチツトは別の時の微笑をなほ唇のあたりに見せたり。臘の如くに色あせたれど。なかくに美しさは變らざりき。」

十四箇月の前。初めて相見し折の青き衣を身に着けて。マヨセツピナが十字形の飾をば頸に掛けたり。

世の中に歎あり。いかなる手も。これに觸れむには。優しさ足らざるべく。いかなる胸も。これを究めむには。強さ足らざるべし。これに向ふ人は。言葉はなく

て。頭のみ俯がる。この歎をおもひ遣れば。畏きものゝ前に出でたるやうに。一種の敬あこるべし。

「許し玉へ。」といふに似たり。「許し玉へ。わが破りし愛には。われいかでか訴たふべき、われは優しく。嬉しかりける初の友誼に訴へむとす。結髪の際には許されまじき事をも。妹と思はれし我には許し玉へ。」

「ゲザがこゝろ争でかこれに向ひて怨ずることを得む。少女が身に着けたる青き衣は。その襲ごとを聲をなして。許し玉へ。」

「許し玉へ。」といふに似たり。「許し玉へ。わが破りし愛には。われいかでか訴たふべき、われは優しく。嬉しかりける初の友誼に訴へむとす。結髪の際には許されまじき事をも。妹と思はれし我には許し玉へ。」

結髪の際の指環をば扱きて。状袋の中に收め。これを臥床の傍なる小卓の上においたり。状袋の上には穢き手して。筆太に書いたる文字あり。「戀しき兄上にかへしまつる。神よ。兄上を護りませ。ゲザは指環を少女が冷なる指に戻して。その手に接吻したり

生死のわかれ路はまことにあやしきものなり。生者は死者の屍を目の前に見る間は。その相隔たりたるこのいかに遠きを知らず。死せる身に對してする事も。なき人知るらむとおもはれて。此残念は少しく生き残りたる人を慰む。

まことに死別の苦を知るは。なき人の遺體を葬りたる後にあり。常の日の習。つねの日の需など我に迫り來りて。「いつ迄か汝は死と相慮れむとすらむ。われは我が權利を求む。」といふとき。まことの死別の苦は。はじめて知らるゝものなり。

あはれなるアンチツトを墓田に送りて。父と共に歸りて見れば。縁いろなる部屋を取り片付けて。アンチツトが目ごころ用ゐられたる物を藏め匿し。食卓には二人前の食の準備整ひたり。ゲザが悲痛はこの時忍び難うなりぬ。

今は若き「井オリ」驛まで。老いたる新聞書きと相向

ひて居り。二人は何をも食はざりき。グザは言葉なかりき。テリレオはグザが手をさすりて。連りに、「あはれなる我子。」とさしやきぬ。

俄にグザは眼を父が面を注ぎ。聲をかすめて。誰なりしか。父上。と問ひぬ。テリレオは下の方を見て。膝の上なる巾をつまさぐり。「われは知らず。」と答へぬ。

「父上よ。何とかの玉ふ。」とグザはいきまきたり。

「われは始終の事を。つゆばかりも知らざりき。アンテツトはわれには打ち明けざりき。わが嫌疑の心をおこしは。つひこの頃の事なり。」テリレオはこの言葉の中に。次第に慚愧の色をあらはしたるのみ。

「さもあらばあれ。アンテツトが誰にか心を寄するを。よも絶えて知り玉はぬことはあらざりしならむ。」といふグザは。目に怒。頬に恥を見せたり。

「かれが迷はまことに鬼ありて魅するが如くなりき。」老人はかく語りて口を閉ぢ。おそろしき秘密あるが如く。復た一言をも出さざりき。

「日々々々ど悲しくのみ暮しぬ。テリレオは勤めれば。また常の如く出入す。グザは緑いろなる部屋にありて。獨り物をおもへり。かれは再び旅立たむとせず。かれ

は故人に逢はむことを願はず。わが未来の幸を語り聞かせし故人に。かくはかなき中に。猶慕はしき人ひとりあり。それはステルニイなりき。

ステルニイの人の憂を解し。人の歎を慰むるさまは。めづらしく優しく。ほどく婦人の如くなりき。そが上。わが未来の幸の頼み難かるべきをば。かれその初にいひき。かれはわがこの歎に逢ひたるを怪みもせざるべし。

グザは人にステルニイが在處を尋ねしに。いま英吉利にありといへり。グザは書をおくりて。アンテツトが俄にみまかりしことを告げ知らせ。さていはく。「また巴里に來むをりは我に知らせよ。われもかしこに引き越して。暫く汝が側にて業を操るべし。この浮世にて。なほ我を慰むべきものは。唯汝が交のみ。」

この文には何の答もあらざりき。グザはテリレオが家に選りて。アンテツトが居りし緑いろなる部屋に住みある日少女が用ゐ慣れたる机に向ひて。封筒やあるど。引き出しの隅を掻い探るほどに。板の罅隙に芥まりて。ちぎれ残れる小さき手紙の端あり。取りて見れば。まがふ方なきステルニイが筆の迹なり。

「うれしさいかばかりなるべき。リュウ。ド。ラ。モンタニエにて。一時に逢ひまゐらせむ。君を戀ふるステルニイ。」

「グザは再び讀み返し。鈍く。おろかなる目なごしして四邊を見まはししが。胸を射抜かれたる人の如く。もろ手を高く。さし伸ばし。氣を喪ひて鋪板の上に仆れぬ。

緩なる熱病に侵されて。グザは褥に就きしが。僅に残りたる力さへ。これにて斷たれたり。

髮疎になりたる病後の人となりて。一間のうちを漸う歩きまはるやうになりしとき。グザは先づ紙と筆とを

たづねき。書かむとするは。ステルニイにおくるべき文なり。かれは日毎に稿を屬しては。また扯き裂いて投げ遣りつ。病める間。うみの母も及ばぬ看病せしテリレオは。おし止めて。「心をな苦めそ」と繰り返していへど。グザは太息つきて。「これを出しやりて我心を輕うせむ。」といふくも。書いたる文をば出しやらざりき。ある日グザは忽ち悟るところある如く。「この事は文に書くべきにあらず。わが名譽をとり返さむには。まのあたり言ふに若かず。」といひしが。これよりは養生に心を用ゐて。また文かゝむとはせざりき。

グザは又ものおもひの中に日を送りぬ。その悲には燃ゆる如き耻雜りたり。結髪むかしの妻ことの事。むかしの友の事ことを問ふ人に逢ふこともやあらむと思ふごとく。血兩の頬ほほのぼり來て。家の内にはことなる人のなきときも。壁かべにのみぞ向むかはれる。

時ありて結髪むかしの妻ことを欺あざむき汚けがしたる友の事をおもひ出せば。心を狂はしめむとする怒氣こらおこり來りて。總身しん戦せんけり。さてかの友のその昔むかしわれに竭つし。さまぐの情誼じんぎ。その交際かうさいの優やさしさ。その聲音こゑの誠まことありげなりしなごにおもひ及びては。グザは顛こめ顛かみのあたりを抱かかへて太息たいしをつき。かゝる人のいかなればかゝる事をなし出だしけむと訝いぶりぬ。

幾日か立ちぬれど。グザはステルニイを尋ねに出でむどもせざりき。かれはいたく人を怯おそれて。晝ひるの間はテリレオが家を去いはしむ離はなれぬと。身漸みづかう健すこになりたれば。今はとて夜に入りてより出で歩くやうになりぬ。グザは年尚としなほ若わかかりければ。興きようを買かひ自ら忘れむものをも。狼おとしなる筈はずにも列らぶことあれど。かれは人々の職しやくを覆おほるをりも。色いろ着きざめ。目を遠とほきどころに注そぎて。言葉もなく片隅かたぐすに坐まするのみ。

グザはこれをも面白おもしろからずとして程ほどなく止めつ。後に

は愛を忘るゝ術を餘所に求めて。やう／＼酒に耽るやうになりぬ。音樂をば殆ど全く打ち棄てたり。そを何故ぞといふに。音として昔の紀念を喚び起さぬはなかりければなり。縱令食を得むためなりとも。せめて樂を奏する業を棄て果つるに至らざらましかば。斯くまで衰ふるとはあらざりけむ。惜むらくは。亞米利加より持ち歸りたる金ありて。かれの酔ひ痴れて世を渡るにさし支なかりき。

テリレオはわが愛で育てつる子のかく望を絶ちて悲痛にのみ沈み。そのめでたき材能も次第にいひがひなく廢れゆくを見るに堪へず。をり／＼行末の事をばいかにかすると問へど。ゲザは唯だあはれなる聲にて。「われもいつかは再び勤むるときあらむ。されど今はあまりに憂きに堪へねば。」と答ふるのみなりき。浮世に遠きラアエスタイン街の片蔭に。ゲザが身はやうやく沈み果てなむとす。むかし養父なるテリレオが沈み果てし如くに。あほよそ大都會といふ大都會には。ラアエスタイン街に似たる街あるものなり。巴里にはかゝるところいと多し。事の敗に逢ひ。心の苦を負へる人は敵に嘲ら

れむことをおそれ。友にはまたやさしき中に侮を包みたる憫の目にて見られむことを嫌ひて。かゝるどころに通れ入れり。この類の人も身を終ふるまで。かくまであやしき闇の世界にあらむとはあもはず。その初の心にては。まばしこゝに耻を掩ひて。創の癒えむ時を待たむとするのみ。この類の人はその自ら設けたる配所にて。さまざまの經畫をなし。再び世にあらはれて。會替の唇を雪がむと。美しき夢を見るなり。されどこの夢や。絶えて眞になりしことなし。その故奈何といふに。かゝる街は墳墓なり。年經てこの淋しき世界より出で來りし人は。身のまはりに行ち腐れたる土の臭を帯びて。早く廢れたる思想を懐きたれば。甦りたる屍の死したる語を操ふに似たり。

第十八回

白耳義獨立新聞には「惡魔」は近き世にあらはされたる樂府の上乗なりとあり。俗人等は「惡魔」の中には不朽なるべき節々いと多しといひあへり。「惡魔」は大喝采を博したり。と上等社會の人々は物語りす。

さればハアエスタイン街までも。「悪魔」の噂聞えぬ。
 十とせあまり前にはバガニニにさへ比べられ。今は人
 知らぬモンテエの伶人の末に列なりたる。衰へ果てし
 「井オリン」彈きもこの噂を聞きつ。

テリレオが身まかりてより久しうはなりぬれど。ゲザ
 はなほおなじ古家に佳めり。少しばかりなる財産の殘
 れりしをも。養父が老病の薬餌のよろにつかひ畢んぬ。
 今は唯だ僅に朝夕の烟を立つるのみ。

心は闊くなり。力は衰へたるに。酒にさへ耽りたれど。
 今も折々は何事にまれ爲さばやとあもふ念生せざるに
 あらず。されどいつも色々の事ありてこれを妨ぐステ
 ルニイが「悪魔」の曲の合奏を指揮すべしといふことを
 聞きしとき。かれが怒は極めて劇しかりき。いかなれ

はステルニイは我に出逢ふべきとをあとで。再びこ
 のアリユセルには來むとすらむ。さてつぶやきていは
 く。否々。世の人の皆我を忘れたる如く。ステルニイ
 も我が世にありといふことを。つゆ念頭におかざるな

らむ。さらばステルニイは我を死せりとあもへるな
 らむ。ゲザ若し世にあらば。その名聲の絶えて聞えず
 なるべきにあらねば。

ゲザは限なき苦惱を覺えき。この苦惱は結髪の妻の歿

りしが故にもあらず。心を傾けたりける友の我を欺き
 しが故にもあらず。ゲザが前に立ち現れたるは。滅び
 たる技師の鬼なりき。

「悪魔は近き世にあらはされたる樂譜の上乗なりとか。
 利分もなきこと哉。嘘の皮を。」ゲザはかくつぶやき
 ぬ。

ステルニイが作譜の技師をば。冷なる心もて早く測
 り知りたり。あもび出せばステルニイが當座の曲。そ
 の剽竊して主意を失ひたる節こそ可笑しけれ。さいつ
 年ある貴婦人に頼まれて。「パレット」の曲を作らむと

せしときも。ステルニイは徒に心のみ苦めて。日を
 累ねれども稿を脱すること能はざりしを。當時交深
 かりければ。咄嗟の間に作りてやりぬ。かの「パレッ
 ト」の曲のみは。その頓評判よかりきとぞ聞えし。

さるを今ステルニイ大作譜家となりぬとか。
 わが受持の譜の一段をば。ステルニイが手並いかにぞ。
 眼を鋭くして見度せども。間のみ多くてよしあしを知
 らむやうなし。

兎角するほどに二度目の試の日になりぬ。初度の折
 の如く。こたびも眼病して休まむかどもあもひしが。
 それも心ならず。何ともわかぬぞ。胸引き緊むるやう

なる感ありて。我身は「グラン。ダルモニー」の樂堂へ
引き寄せられき。こたび來しは「ピヤノ」教ふる女とロ
シニが友とのみにはあらず。プリユセルにて名を知ら
れたるまろうどの伶人は皆壇のめりり聚ひぬ。樂を
知りたる貴婦人は平間の前の列を占めて踏段に向ひて
居り。一座の氣色は何となく改まりたり。心待する熱
はありあふ人々の脈に漲りたり。中には評判きはめて
高きものを迎ふる心には難り易き疑念を懐けるもあれ
ど。そは一座の少數のみ。嘗て忙はしき交際官なりし
シルワ伯は。暇あるごとに「井オロンメル」を弄ぶ人
なるが。志きりにけふの曲のすぐれたりといふ噂を説
きて。貴婦人に聞かせたり。ステルニイが作譜の力か
ほどならむとは。われもそのかみは思はざりきと伯も
いへり。

「われも志か思はざりき」とロシニが友もつふやきぬ。
「ステルニイはいかにしてかの曲を作りけむ。そはわが
解せぬことなり。されどかの曲の傑作なることは争は
れず。何等の「メロヂイ」ぞ。人を壓し。人の神經に偷
み入り。人の血にしみ込まむとするは。まことに彼曲を
奏するときは。鬼物ありて聲波の間をさまよふ如し。」
某の侯のいはく。「大いなる器は晚く成り上がるもの

と聞く。婦人がたの中には。猶ほ記憶え玉ふもあるべ
し。ステルニイがあるとき「チゴイナル」の童を伴ひ
來て。その業を誇り示ししことあり。あれはいかにな
りぬらむ。世に神童といひはやされし童の。まことに
天晴なるものになりしことは。昔よりなかるべし。」
「童とは紐付きたる衣を着たりし尙僕の子のとにや。」
と一人の貴婦人いふ。

「否。さにあらず。紐付きたる衣を着たりしとは別なり。
わがいふはラアエスタイン街より伴なひ來し子の事な
り。侯はかく分疎せしかど。貴婦人の群には。ひとり
としてグザが事もおもひ出すものなかりき。」そはいか
なる童にかありし。」と人々問ふに。侯「させるものに
はあらねど。神童のためしにどて引きつるなり。當座
の曲の妙なること。かの童の如きは稀なりき。されど
後にはいかに成りゆきけむ。貴婦人等も聞きて。「げ
にさることもありけり。かの童のなりゆきこそ知りま
ほしけれといふ。

この問答の間に一座の氣色動きぬ。壇に登れるはステ
ルニイなり。掌を拍ちて迎ふるものあり。進み近づき
て手を握るものあり。身を曲げて禮するものあり。
かれは譜架に歩み寄りて。伶人の群を見渡しつ。この

群にはけふ關けたる人なかりき。この時かれは忽ち色を失ひつ。打拍杖を取りたる手は。力なげに脇に垂れたり。されどかれは崇拜したる貴婦人の目は。光を帯びて彼がかたに仰ぎ見たり。かれは架を敲きつ。凄しくなれる廣間に響き渡るは。冗なる聲多き「惡魔」の曲の初段なり。

聽衆は望を失ひて肩を聳かしつ。ゲザは卑む色を見せて口角を引き下げたり。ゲザは初め俯きたりしが。今はやうやう頭を擡げ。後には膽太くなりて。むかしは我本尊ともあがめ。我世界とも頼みしステルニイが面に。眼を注ぎて苦笑せり。

暫くして「アルト」謳ひの女最初の歌を謳ひつ。聽衆は電氣に撲たれたる如く震ひ。魂を喪ひたる如く耳を傾けたり。そが中に誰にも増して耳を欽てたるはゲザなりき。

ゲザが胸にはあやしき感あこりて。身うち悉く慄ひぬ。この感は暖なる少年の樂の如く。喜餘りて狂へることろの如くなりき。この感はむかし彼歌をみづから書き卸ししときの感なりき。我曲を聴く樂は。我曲を偷まれたる怒を抑へて。その起るを妨りたり。ゲザは一たび喪ひたる魂を。人ありて再び贈りかへし

しやうなる心になりぬ。かれは唯これ聴きて餘念なかりき。

喝采はいよゝ高くなりぬ。ゲザは夢心地になりて。人と共に「井オリン」を弾いたり。どころゝにステルニイがみづから挿みたる冗なる聲あるに逢ひて。ゲザはうるさげに肩を曲げたり。

「絶妙の處は今ぞ。」と聽衆のうち此さやく聲す。「これは棄てられたる人の對歌とて。不朽の價ある節なり。」

別るゝ人の聲は怒むが如く。訴ふるが如く。これに雜りたる神の使の童の歌は。やさしく。軟に。忽ち斷え。忽ち續きて。過ぎ去りし歡の夢を喚び起こさしむ。

ゲザは唯だ聞きに聞きたりしが。その「井オリン」の月は俄に動かずなりき。目の前に浮ぶは緑いろなる部屋壁なり。ステルニイは微笑みて「スピチット」に向ひたり。我側には愛らしき少女ありて。式の如く兩手を軽く疊ね。頭をば重さに堪へぬやうに右の肩に傾けたり。あゝ。これ「チツン。マシオル。ドロオレ」の段なり。聽衆は物狂はしく呼びぬ。俗人の群は立ちあがりて掌

第十九回

を拍てり。しろうと俗人は壇のめぐりに集りぬ。折し
もあれ。こは何事ぞ。息もたえぬに。唇の上には
泡沫を見せ。眼の裏には怒を輝かして壇の上なるステ
ルニイが前に馳せ寄るは。「井オリン」ひきの一人な
り。「盗人。人殺し。」と咳噴れたる聲にて叫びつゝ。「井
オリン」の弓振り翳して。ステルニイが面を打ち。氣
を喪ひて鋪板の上は倒れたり。

ステルニイは徐に額を撫でたり。いかなる變に遭ひて
も度を失ふことなく。斷頭臺にのぼりても。猶餘勇を
示しつべき。世慣れたる魂は。かゝる事には動ぜず
とちぼしく。人々の氣を喪ひたる「井オリン」ひきを
昇きて出づるを見送りつゝ。今しも進寄りたる「オル
クステル」の長に向ひて。「謔妄狂といふものゝ興りし
なるべし。さりながらわれをかゝる目にあはせ玉ひし
はあん身が無念ならむ。」人々は席に戻りて。試はまた
はじまりぬ。「井オリン」ひきをば昇かせて家にやりぬ。
グザはわれに還りて。箏笛といふ箏笛。手篋といふ手
篋を掻きさがしつれど。「地獄」の曲の原稿は一ひらも
あらず。作りかけの「オペラ」の斷簡のみ。こゝかしこ
より出でぬ。

犯罪の街と譚名せらるゝアウルリア。エクステリヨオ
とバット。モンマルトルとの間に一條の巷あり。世を離
れたることは。ラアエスタイン街の如くならぬぞ。貧
しきことはかの街より甚しかるべし。ラアエスタ
イン街には十字架に懸りたる基督の像ありて。我手だに
かく釘づけにせられずば。汝達をこの胸に引き寄て。
暖めてもやるべけれど。かくせられては力なしといは
むやうなれど。こゝにはこれだになし。ラアエスタ
イン街には彩りたる寺の窓より光洩れて。貧苦と罪惡と
を照せども。こゝにはこれだになし。古き寺は既に潰
えて。新きはいまだ立たず。

バット。モンマルトルの假づくりの塔に。あやしげな
る吊鐘あり。職人の仕事場か。さらずは涼車の停車場に
あるべき鐘のやうなる聲して。斷末魔とちぼしき加特
力敵少しばかりを。興醒めたる共和の民の敗宅にひ
かせ遣れり。
こゝには古本屋せぎあひたり。おほくは虎犬に守らせ
たる木づくりの骨董店の。風にゆらぎたるもあり。
このモンマルトルの一區には珍らしき事一つあり。こ

これに賣るものをば。必ず反古に包みたり。書をかきたるあり。文を書きたるあり。譜を書きたるあり。人の面を吹くものは。滅びたる技藝の生活のなごりの塵なり。夢にのみ見つる屋氣樓の焚け失せたるのこんの灰なり。

數かぎりなき貸部屋には。年若き藝人あまた住めり。こは世に何事をも成すまじきもの共なり。又年老いたる藝人あまたあり。こは世に何事をも成さざりしもの共なり。耻を知らずして猥なる行するものと。憤を呑みて饑渴に苦むものとに打ち雜りて。力ぬけて。疲れ果てたる空想家さまよへり。

ポオドレエルが作りし散文小詩といふものに。疲れ果て、倒れむどしたる三人の。ちの／＼背の上におそろしき「シメエル」(女怪の形したる不朽を謀らむとする妄想)を負ひたるあり。「シメエル」は鏡き爪を人々の肩尖に立てし。その肉を掻き破らむどしたり。このモンマルトルの區内に住める藝人もちの／＼その「シメエル」を負ひたり。その疲極まりて倒れむどしつゝも尙ほ倒れざるは。未だ重荷を御さればなり。その「シメエル」の消ゆるときは。即ちこれを負ひたる藝人の臨終の期日なり。この區のうちには。材能なきに材能

ありとちもへる藝人群をなしたり。されどこの痲なる人の間には。をり／＼まことの名人の老ひて世に棄てられたるあり。かゝる人は最早影だになくなりたるもかしの譽を。取り返さばやとちもひまどひて。唯だ埃の上へののみ名を署するなり。

こゝの人は皆夢の中に日を送りて。魂はつねに本通りのかたに飛べり。かしこは僥倖の街なればなり。その息を屏め。耳を飲て、來ぬものを待つ心の。博奕する人の仇なる望に智を滅ぼし。髓を枯らすにや似たらむかし。

とある朝モンマルトル區なるステンケルグ街といふところの最も卑しき貸部屋に遷る人ありき。こは藝人のカリオオルニヤと聞えたる巴里に迷ひ來ぬるゲザ。フアン。ザイレンなりき。かれはラアエスタイン街に住み憂くちもひて佛蘭西には遷りしなるべし。流車の中にて邂逅ひし中音うたひの男。この貸部屋をばかれに教へき。こゝはいと静なるどころにて。勉強して業を成すには究竟なりといへば。ゲザは喜びてその教に従ひぬ。ゲザは今もなほ業を立てし名を成さむとちもへるなり。むかし或る貴族のおくりし上等の「井オリン」ありしを

賣り拂ひて。かれは千「フラン」の金を懐にしたり。かの「井オリン」を千「フラン」に賣らむは。ほどく途に投げ棄つるにあなじと思ひき。されど此巴里行は身を立つる基とおもへば。樂器一つは物かは。あのが豚のうちを流るゝ血を賣らむも容易かるべし。遠からずして我新作を出さむをりは。喝采の聲雷の如くならむ。その時にはステルニイもわが前に俯して。頭をばえ擧げざるべし。悲憤の念は胸に逼りて。握り詰めたる指の爪は手の甲にも通るべき程なれど。ゲザは自ら抑へて。その氣色なかくに落着いて見えたり。ステルニイが戴ける冠は原ど是れ贖品なれば。まことの主なる我。いまより勉めてきた此の如き著作を出さば。かの冠をかれが頭上より扯き落さむこと。なんでふ事のあるべき。いさゝかなる才を懐けるものにも。一生涯にひと度は凱歌をうたふ時あるものなり。いはむや我はよの常の才にあらざ。我には天才あるものを。巴里に還りてのはじめの日には。ゲザは心地すがくしうおぼへぬ。中音うたひの男はゲザを促し立て。まことの本通りをそいろ歩せむといふ。まことの本通りとは。新「オペラ」と「ドレヘヌ」の間をいへるな

り。ゲザは大都の人ごみのところを五月蠅しどもひてこれを辭み。中音うたひが都に來たる田舎人の習とて。忙はしげに巴里の真中さして行くを見送りつい。あのれは横りバット。モンマルトルのかたに足を運び

どみれば草木疎なる小公園を。丘の上に開けるありて。あやしげなる木づくりの梯をかけたなり。シヤム。セリセエ。バルク。モンソオ杯にて遊ぶ華奢なる子供とは殊にて。身は瘦せ。顔は垢つき。破れたる衣を着たる小兒あまた。朱の如く赤き砂道の上につどひたり。園のあなたは。荒蕪にて。石灰の塵を帯びたる草ところのあなたに生えたるが。向ひの破屋の檐下まで續きたり。

巴里はこゝより幾里かあらむと疑はる。ゲザは園の中に据ゑたる木の長椅子に腰懸けたり。ゆくすくは職工になりて人を罵る聲なるか。さらば卑しき女になりて妄りに笑ふ聲なるかとおもはる。小兒のもろごゑは。耳に滿ちたり。かれはこの時に限なき疲を覺えき。

若かりし程はブルクセルより巴里への旅をば旅ともおもはざりしを。いかなれば今日はいかかく疲れけむ。かれが頭はやうやく低れて胸についたり。この假寐の夢に

グザはブリユセルの公園なる眠ぶたげに戦げる木の下の。アンテツトに肘をかしてそゝろあるきす。こゝには大いなる水たまりありて赤き罌粟のはな片二つ三つその上に浮び。青き空のいろはこれに映じたり。かれは少女に向ひて。我にはまことの天才あれば。ゆくすゑは大いなる業を成さむとさゝやきぬ。美しく少女の暖なる身。われに寄り添ふとおぼえて。

グザはあどろきて醒めぬ。目の前には袖つきたる青き前垂して。白き帽子を被りたる小娘ありて。冷き指を假寐したる人の手に觸れ。園は早や鎖さるゝに。醒め玉はずや」といふ。

空には「アングルス」の祈誓（神の使マリヤが許に來ぬといふ祈誓）の鐘の聲響きわたれり。グザは立ちあがりて。丘を下りぬ。物の腐るゝ濕氣の臭。丘のほとりより立ちのぼりて。きれ々なる霧は次第にモンマルトルの貧苦の塚を罩めむとす。

グザは部屋に歸りて燈を點じ。身慄ひしつゝ一間の隅々に眼をくばりつ。こゝの壁をばもと柑子いろの地に青き文をおきたる紙にて張りしものなるが。單調なるよこれ色にぞ今はなりたる。一方には灰いろの「カミノ」爐の鐵のちほひしたるありて。その爐板の上には

素焼の厭なる人形二つ据ありたり。ステンケルク街の事に詳しく。おなじ家に部屋を借りたる。かの中音うたひの男の話に聞けば。こゝに据ゑたる人形はチオドリユイルといふ人の作なり。「チオドリユイルはいにしへのミケランジャロにも劣らざるべき彫工なりしが。情なき公衆はこの天才を顧みざりき。」と中音うたひ云ひき。「なに。天才ありきとか。」とグザはこの厭ふべき人形を見て叫びぬ。「かゝるものを造りし男には。よの常の才だになかりけむものを。」グザは天才といふ言葉のかくまで濫に用ゐらるゝを歎きぬ。

「さなり。さなり。」と中音うたひ答へき。「世に藝術の妙を知らせむとて。かれは産を傾け。力を費して。「エクチエ。ホオモオ」こゝにこそ其人はあれといふ。拉甸語なり。かくいひて。ピラツスが基督を猶太人に引きあはするどころ）を刻みき。されど大理石は價高きものなり。かれは鬱症になりて酒に耽り。つひにはかゝるものゝみ作るやうになりき。

グザはこの言葉を聞きて身ぶるひしつゝ「その人は今いかにかなりし。自殺をや遂げつる。」と中音うたひ「否。かれは猶世にあれど。その業をば止めて。娘の世話になりたり。藝人の娘のいかなるもの

なるかは。君も知り玉はむ。昔は親子の縁を截つたり
といひて。逐ひ出し、娘なれど。今はその世話になり
て。何事をも忘れたる如し。かれはたゞ娘の上をのみ
忘れしにあらざ。世事をばすべて忘れ果てたり。暖き
部屋に居りて。をりくは「アブサン」酒一杯飲み。
殊突の戯するを。かれはこよなき樂とせり。その宿は
「オテル。ド。ナンシイ」とてこの街の隅なり。往いて
見むとちもひ玉は、明日伴ひまゐらせむ。若き藝人
共はをりくかれに馳走して。可笑しき藝術論を聞く
ことあり。」

グザが部屋に歸りて先づちもひ出でたるは「オテル。
ド。ナンシイ」に住めりといふミクランマエロが事な
り。グザは爐板の上なる人形をしばし打ち眺めてあり
しが。猶熱く見むものをと。その一つを取りあろして。
ほの暗く「ラムプ」にさし付けた。塑像を觀る眼をも。
グザ流石に具へたれば。このあやしき人形にも。こゝ
かしこに名匠の手の牙残りたるを見出しつ。
グザは覺えず聲を放ちて泣きぬ。持ちたる手のいたく
震ひければ。人形は床の上にはたど墮ちて。そのまゝ
微塵になりぬ。されど部屋の貸主は。直打あるものと
おもはねば。償ひを求めむとせざりき。

グザは酒を絶ちしに。胸は緊めらるゝやうにて。目の
前には紅の雲の團をなしてまろがりゆくあり。おそ
ろしき疲に。身は痺えたる如くなりき。されど彼は復
た飲まんとせで。作譜にどりかゝりぬ。初の程は例
の「オペラ」の局を結ぶる遠からじとちもはれぬ。瞬く
間に書き終りたる譜の紙。身のほとりに堆をなせり。
勢づきて唯だ書きに書く程に。忽ち空想の絲絶えし
かど。グザは深くも意に介せざりき。かく製作の力弛
むことは。壯なる時にもありければなり。また興の動
かむをりまでは。しばらく鏡を畜へて。今まで書いた
るを刪潤せばやとちもひて。こゝろみに翻し見るに。
こはいかに。我ながら通曉しがたきまで妄なる節おほ
く。どころくには拍子の全く脱ちたるあり。地は皆
きれくなりき。中にはめざましく美しきところあれ
ど。そはいと稀なれば。唯だ是れ灰燼のうち遺りた
る立派なる斷續にぞ似たりける。心にかゝるはこれの
みならず。樂府に用ゐる符標のうち忘れたるもの少
なからず。これをおもひ出さむとて。夜を通して藏書
の中なる作譜論を閲し。あく朝また始より書き改め
などすることありき。
造作もなき一小段をも書損なきやうに仕上ぐるは。堪

へがたきまで難義になりぬ。心を専にし。思を凝すやうなることは。最早及ばずなりぬと覺し。されどグザは骨をば惜まざりき。唯だ堪へ忍びてなさは。いつかは出来上がる期あらむと。みづから志を勵ますものから。生憎に紙の上にてたばしるものは涙なり。

グザは葉の成らぬうちに。錢の盡きむことを恐れければ。節儉すること甚しく。今は相子いろの部屋より屋根裏に引き遷りぬ。食事も日に一たびとしたり。髪は白うなりぬ。物はむとすれば口誦り。もの書かむとすれば手潔ふ。

夕暮に清き空気を吸はむと。ベット。モンマルトルにゆくが習となりたれば。かしこに遊ぶ小兒は皆この翁の面を見識るやうになりぬ。グザが木の長椅子に坐して。手に鉛筆を持ち。膝の上にて手帳をおき。空を睨みて何事やらむつぶやくとき。小兒等は近く寄り來て。やさしく挨拶す。嬉しければ愛らしき片頬を撫で。時によりては一人を抱きて膝の上に載するに。おそろい色もなし。昔がたりなどして聞かせば。さぞ喜ばむとおもへど言葉出でず。

ある日グザは「井オリン」を抱いて來ぬ。子供の心に協ふやうにと。勉めて短き踊の曲を奏づるに。酒を絶

ちてより指俄に剛くなりて。手に持ちたる弓さへ響ふを。穉きものゝ手前も恥かしとおもひぬ。されど子供のためには。この曲もあもしろきにや。さあ、この戯したりしを。皆打ち措きて。聴きに來ぬ。中には手を背後に組みて。頭を少し仰向け。心を籠めて聞くもありき。さらぬは輿に乗じて。相抱きて舞ひ狂へり。

さて子供のためには。當座の曲を奏てむとするほどに。指頭より漲り出づる聲の。何とやらむ耳慣れたるに心づきて。おもひ廻せばこれはこれ。三十年の昔「サブロン」なる曲馬小屋にてつねに弾きし節なりき。

グザはこれのみを樂にして。日ごと「井オリン」を抱きてきたなき公園にゆきぬ。あはれなる子供の喝采もいまはかれが涙を醫すやうになりぬるなり。中音うたひの男との交はやうやう深うなりぬ。この男は「オペラ」座にゆきて試験を受けしに。採用せられざりしかば。その試験には依怙の沙汰ありといひ。その座をば俗人ばらの亂行場にて。今にも滅ぶべきものなりといひ。人に向ひておのれがその群に入らざりしを物怪の幸なりと誇りぬ。モンマルトル區のうちな

る踊茶屋に僱はれて。衣食に不自由なきほどの給料を受くるやうになりしは。この頃の事なり。

「グザはこの男に著作中の「オペラ」の一節を聞かせよと所望せらるゝこと頗なれど。はじめは辭みて應ぜざりき。されどこの男の氣色にも。わが作譜の業をなすといふを。真偽いかはとあやぶむさま見ゆることの心苦しければ。今は我より求めて聞せむとするに至りぬ。形ばかりなる古き「ビヤノ」に向ひて。時を吝まらず躍いて聞かせ。をり／＼はまわ噎れて空洞なる聲張りあげて。「アライ」を歌ひぬ。今は「そは面白からむ」といふ人の誰なるを問はぬやうになりしなり。彈き果て、グザは興なき興に乗じ。眼をひからせ。もろ手打ち振て。いかに。規模のおほいなるを見玉へ。と誇顔にいふさま。むかしの謙遜には似ずなりぬ。

どかくする程に錢竭きぬれば。錢を賣り。書を賣りて僅に自ら支へたり。されど中音うたひの男をば。今も後輩扱にするを。かの男氣の毒がりて狂人を看護るやうにいたはり慰めつ。

ある日グザ中音うたひの男の部屋をおどづれて。共に「カミン」爐の前に坐し。さま／＼の物語せし折。かの男指もて縁れたる髪を掻き上げながら。「おん身が天才もおん身を養ふには足らじとおぼゆ。」といひき。

グザは眉を蹙めて敵手の面を見つめたり。

かの男はやさしく。「あしくな聞き玉ひそ。おん身が「オペラ」ほどの大作の興行せらるゝまでには。猶歲月の立つべきを。かくて居玉はむは。あまりに謀なきに似たるべし。それ迄の繋とあもひてさるべき糊口の業をもなし玉は「グザ」。

「グザはといきつきて。短き譜を作らばいかに。『ロオマソス』のやうなるものを。」

中音うたひ。「それは錢にならざるべし。『ロオマソス』など作るものは。これを歌はすべき歌女。をんな役者などど相結びて。その歌を流行らするなり。おん身縱令かゝる因縁を來め得玉ひても。かゝるものを作らむとて。切角の力を碎き玉はむは益なかるべし。それよりは伶人の群に入りて『井オリン』彈き玉はむかた。なか／＼に優りたらむ。」

「さなり。座に出でむは一つの手段なるべし。」と答へしグザはひそかに我指の剛くなりたるを思ひて。身も震ふほどなれど。この耻を人に言ふべきならぬば。「それもよけれど。座の勤はあまりに五月蠅かるべし。度々の試を奈何せむ。をり／＼は夜に入ることあらず心。」といひまざらはしつ。

中音うたひ。「否。さる煩はしき業は御身には出來ざる

べし。そは著作のためにいみじき妨ならむ。わが心當りはさるむづかしき地位にはあらず。試などいふことはなき處なり。」

「グザは「そはいかなる處にか。」と微なる聲して問ひぬ。中音うたひ。「われこのごろ『オテル。ド。ナンシイ』にて。ある曲馬師の群なる茶利役どちかづきになりぬ。

性の善き男なりき。興行の場所は「ワウルワア。ロシユクア、なりといへり。最上等の曲馬にはあられど。軀裁わるき處にはあらず。おん身が上をかの茶利役に話してゝろみしに。丁度『井オリン』ひき一人闕けたりといへば。」

中音うたひが言葉はいまだ畢らぬに。グザは跳り上りて。無禮なる友の部屋をのがれ出でぬ。グザはこれより後は。かの男に物いふことなかりき。

グザが力は次第に衰へゆきぬ。豚の中をば。冷えかゝりたる鉛の如き血。澱みながら流る。目の前にはいつも塵舞へり。耳には蝴蝶の疲れて羽打つ如き音聞ゆ。食粗なれば。養足らず。つひには暮に就くやうになりぬ。

人善きグザなれば。おなじ家に住めるもの一人として氣の毒がらぬはなし。部屋に貸主さへ酷くは扱ひ得ず。

食をふくりて食はするものあり。臥床を整へて寐さするものあり。新聞紙もて来て貸すものあり。グザはかかる恵を受くるごとに。耻づかしげに微笑み。遠方のみ注ぎたる目にて禮を陳べ。人去れば半醒半睡の境に入れり。

ある日の晝過ぎの事なりき。夢とも現ともわかぬ間に。軟なる手にて我額を撫づるものありと覺えて目を開きつ。臥床に居寄りて。項を屈め。我顔を覗き込みたるは。老いても猶美しき女なりき。白くはなりぬれど。まだ豊かなる髪は。やさしく老いたる面を圍みたり。姫は口籠りながら「グザよ」と呼びぬ。その聲は遙なる

ところより聞ゆる如くなりき。グザはおもひ掛けぬはあどろきぬ。かく呼びし聲は我母の聲なりき。我臥床に居寄りて立てるは。相見ざること二十五年なる我母なりき。

グザが母は「フェルナンドオといふ輕業師の妻になりてより久うなりぬ。中音うたひの男が話し「ワウルワア。ロシユクア、なる曲馬小屋の主はフェルナンドオ夫婦なるが。この頃は仕合せよく世を安う渡れり。グザが母は上氣にこそありつれ。もとより悪しき人にはあらずりき。棄てし出でし後も。しばし我子はいかにな

るが。この頃は仕合せよく世を安う渡れり。グザが母は上氣にこそありつれ。もとより悪しき人にはあらずりき。棄てし出でし後も。しばし我子はいかにな

りしかど心に掛けて。人して搜らせしに養親に厚くもてなされて。上等社會の人に交れりて聞えたれば。心や、懸居るものから。上等社會の人に交れりといふに膽を奪はれて。近づくかむともせず止めぬ。されど遠くよりはグザが姿を見て。心を慰むること屢なりき。「どかくする程にグザが名世の中に聞えずなりぬ。さるにこの頃相識りし中言うたひのアウグステイが瀝車にて道づれになりて。おなじ家に住めりといふ珍らしき友の事を語るをしば、聞きしが。その名をばきのふ始めて知りぬ。

マルガレエタはこの顛末を涙ながらに物語りて。その間汚れたる枕を据え直し。袂ちほひの巾の皺になりたるを伸ばしなどするグザはたするが儘になりて。をりくは口の内にて禮をいひなどすれど。あまりに意外なる再會なれば。何事とも思ひ分かず。母はグザが應ぜぬに氣あくれして。聲をかすめて語りつぎていふやう。「おん身が『井オリ』ひきしを聞きしことあり。幾年前の事なりけむ。ところはニツツアなりき。わが子とおもへば。面目あることにおもひぬ。その時おん身の作りし譜を買ひ。今猶持てり。巻の首にはおん身が像ありき。美しき姿なりき。」

グザはこゝまで聞きて。顔を袂の中に埋め。死に瀕ひたる人の如く息たえぬなりき。この苦痛を見て。母は今までの遠慮を忘れ。「あはれなる子よ」と耳語きつ。グザが白うなりたる髪を梳りつ。むかし軟き練髪をさすりしやうに。母。「あまりに思ひな屈しそ。おん身に天才ありといふこと。おん身に世の人のつらかりしことをば。われ皆知れり。これよりは着病息なく。おん身が本腹の日を待たむ。體だに健にならば。また何事か成らざらむ。わが家に引き移れかし。誰も邪魔はせむ。唯だ邪魔にならぬやうに世話してやらむ。人の來ぬやうなる小き部屋もあり。そこにて心任せに仕事せよ。」

グザは徐に面を擧げしが。劇しき咳に瘦せ窪みたる胸はゆすられたり。母はグザが骨立したる肩の下に手をやりて。少し擁へ上げ。疲れ果てたる頭を我胸に倚せかけて。呼吸のたやすく出来るやうにしつ。さて涙聲になりて。「いたうも瘦せたることよ。この汗疹はいかに。最早きれくにならむとす。あすは新しきをもて來べし。落着きたらば。少し食べよ。かづくやうに。」かく言ひて。手づから煖めたる汗を飲ませつ。汗もいつグザは物をもいはず。言ふが儘になりたり。汗もいつ

になく旨かりき。日ごろの苦痛。日ごろの恥辱をば。かくやさしく款待さるゝことの嬉しさに打ち忘れて。眠ぶたきまで心おち居ぬ。グザは言葉はあらで。母の手に接吻しつ。

母の目には喜の色見えたり。「曲馬所の帳場をば六時に開けば。今は往かでは協はず。八時頃にはまた來べし。それまで眠りて心をやすめよ。」言畢りてグザが顚顚に接吻して出でゆきぬ。

グザは眠りぬ。夢にはむかしの事浮びぬ。浮びしは歿りし結髪の妻の事にもあらず。我を欺きし友の事にもあらず。浮びしは苦痛なき紀念なり。

グザは夢にラアエスタイン街にかへりぬ。人を酔はさむとする花の香は身を繞れり。目の前には色めたき罌粟の花束あり。枯れたる花びらは大理石の板の上に墮ちて。かすかに響をなせり。

グザが心鹿は跳りて。いふにいはれぬ苦痛また起りぬ。今これにて心滿ち足らば。我身は底なき淵に沈み果てむ。

グザは起き上りぬ。逃げ去るべきか。自殺すべきか。かれは脱ぎ棄てたる上衣を取りあげしが。上衣はあへなくも手より落ちて。身はまた臥床の上に仆れぬ。か

れが魂は碎けて。慷慨にも苦痛にも堪へずなりぬ。四壁のみ立てる屋根裏の間を。この時あやしき神ありて飛び過ぎぬ。こは絶望の神なりき。この神の手に一束の罌粟の花を取りたりき。

日は月と立ち。月は年と立ちぬ。その日ぐらしの藝入おほきブウルワア。ロシユクア、どクリシイどの間に。まばらに見らるゝ男あり。丈高く。翁さびて。風に亂るゝ白髪は頬のあたりを打てり。これグザ。ファ

ン。ザイレンがなれる果なり。顔はまだ美しけれど。心を喪ひたるやうに鈍く見ゆ。折々立ち留まりて頸を延べ。手を耳の後にあつるは。遠方の物の音を聞かむとする如し。しばしありて頭を掉り。太息つきて又歩きはじむ。かれは母の許に住めり。母も。繼父も。弟妹も。むかし名譽ありし人なり

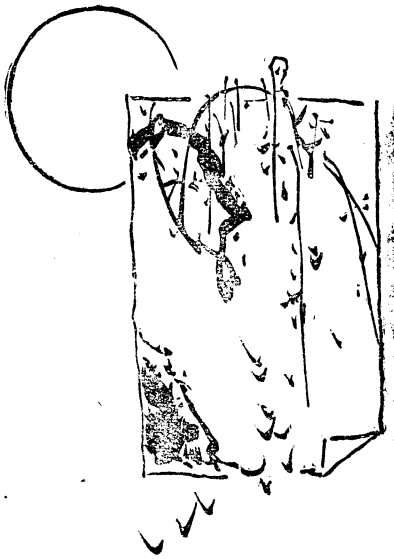
どて敬ひかしづけり。淨き衣を着せられ。旨き食にて養はれ。何につけても善く扱はるれば。今は不幸の身なりとも思はず。待たるゝものは食事のみ。又一杯の

「グログ」(熱酒)のみ。かれは心やさしく。言葉寡く。人には親切にて。母に頼まれたる用をば嚴重に行へり。常には「カミン」爐の前なる腕木ある大椅子に倚りて。睡れる如く。醒め

る

たる如し。
 をりくは心の狂ひたるやうなることあり。譜を書く
 べき紙に。忙はしげに何やらむ書きて。その反古身の
 ほどりに堆をなせり。かゝる時は人々につらくあたり。
 倨傲の色見えて。故なきに怒り罵り。わが行末の業を
 見よといへり。されど人々は意に介することなし。

かゝる疾の作ることば漸く稀になり。又おこりてもそ
 の間短うなりぬ。
 モンマルトルの「ラテエ」とてかれを知らぬ人なし。畫
 工はその横顔を戯畫に作り。踏なる童はその通るを見
 るごとに。肘にて知らせあひて。痴なる翁のえらがる
 がをかして笑へり。
 (巻)



博文館十周年紀念臨時增刊
太陽 第三卷 第拾貳號 終

本號ニ
 限リ 定價金卅八錢

太陽定價

每月二日發兌

版	權	所	有
一冊 (三百頁以上)	金拾七錢	內地郵稅	一冊三錢
六冊 (三ヶ月分)	前金九拾八錢	外國郵稅	歐洲十錢
十二冊 (半ヶ年分)	前金壹圓九拾錢	北米七錢	
廿四冊 (一ヶ年分)	前金三圓七拾錢		

注意(本誌ハ前金ニアラサレバ一切發送セズ●前金切レ候節ハ直ニ
 逕送テ止ム●郵券代用一割増ニテ五厘壹錢切手ニ限ル)

發行所 **博文館**

東京市日本橋區本町三丁目八番地

電話本局 三百三番

編輯人 岸上 大橋新太郎
 發行人 敬利世
 印刷人 愛敬利世

廣告掲載料

三等(五號活字 廿四字詰)

一行金三拾錢

全廿四行 六十四行

一頁金拾九圓貳拾錢

二等 一頁金廿三圓〇四錢
 一等 一頁金三十圓拾二錢